

## 福岡教育大学書道科所蔵書跡目録解題(五) 日本書跡(2) 郷土の書

The explanatory notes on Fukuoka educational college SHODO course's  
collection of classical sho-calligraphy's catalogue V.  
JAPAN handwriting calligraphy (2)  
Kyodono-SHO (local calligraphy)

福岡教育大学美術教育講座書道分野

(平成27年9月30日受理)

### 前言

本研究は、本学書道分野が収蔵する書跡について、その書跡の成立、歴史的経緯、書跡の現状及び書学におけるこれらの活用意義等について明らかにするものである。

先に「書跡目録解題(一)」「同(二)」及び「同(三)」として所蔵書跡のうち、中国の碑石拓本や肉筆書跡の整理・解説をしたが、「同(四)」からは、日本書人の書軸等を取りあげ、その整理を行ってきた。今回は、本学の収蔵における一つの柱となっている、亀井南冥や大隈言道など郷土に関わった書人の書跡を主に集載した。

所蔵書跡の保存状態は、必ずしも良好なものばかりではなく、その尺寸の計測にも時間を費やすこととなったが、書字内容の確定はじめ、背景の考察等は決して容易な作業ではなかった。それらの任をこなしてくれたのは、本学大学院教育科学専攻(美術教育コース書道分野)所属の曾我部綾音・豊百合・高静・日高拓哉・江頭史実・福岡千波・王國梁の院生7名である。

研究にあたっては、進められた個々の調査内容・執筆原稿を更に全員で検討し脱稿したが、未だ釈字の確定しない部分もあり、また、表記上の過誤もあろうかと思う。諸賢のご教導をお願いするところである。

(小原記)

### 凡例

1. 本編は、書道分野所蔵の日本人の手になる書跡のうち、亀井南冥及び大隈言道等、郷土に縁故のある書人の書跡を中心に32点を取りあげ、その書者の生年順に配列し論じた。
2. 作品名は、本学備品原簿記載の名称を基盤としたが、作品内容との関係から、一部新たな名称に変更したものもある。なお、本論での整理番号には、「日書」を付し(例:日書39 亀井南冥 一行書軸)、欄外に備品番号を記している。
3. 本編の構成は、基本的に、解説本文、所蔵書軸の写真、部分図版(落款印も含む)、比較図版及び、欄外注釈とからなっている。
4. 解説本文では、書字された文章内容について、書者についての事項、その書風等、考察した内容をあげている。さらに、書学習上の資料としての価値等の視点からも論じている。
5. 原則として、本文・欄外注ともに、解説においては新字体によって表記したが、釈字や引用文の一部については、原文を尊重する立場から旧字体・異体字等に拠ったところもある。また、項目担当者によって、数字の表記等異なる点もある。
6. 文献の引用においては、書名は『』で示し、書き下しを心掛けたが、解説の都合上、原文のまま引用し、その大意を記したところもある。
7. 欄外注では、所蔵備品情報の他、著録引用に関する事項、登場人物の補足説明等、本文で述べられなかった点を補い、充実を図った。
8. 各書跡の責任担当者名は、本文の最後に〈 〉で示した。

## 目次

日書39	亀井南冥 一行書軸	27
日書40	亀井南冥 行草書二行軸	28
日書41	亀井南冥 游龍	29
日書42	亀井南冥 行草書五行軸	30
日書43	亀井昭陽 一行書軸	31
日書44	亀井陽洲 亀井昭陽撰 宮世亨書堂名潛龍説	32
日書45	亀井昭陽 行書二行軸	33
日書46	亀井昭陽 行書一行軸	34
日書47	亀井幻庵 幻莽書軸	35
日書48	亀井幻庵 三行書軸	36
日書49	亀井小琴 画竹軸	37
日書50	亀井小琴 三行書軸	38
日書51	原古処 天孫軸	39
日書52	原古処 脩竹軸	40
日書53	原采蘋 行草書軸	41
日書54	広瀬淡窓 行草書軸	42
日書55	広瀬旭莊 書画五絶・画蘭	43
日書56	大隈言道 四行和歌軸	44
日書57	大隈言道 歌卷	45
日書58	大隈言道 退棲之歌	46
日書59	大隈言道 行草書軸	47
日書60	大隈言道 華乎観	48
日書61	大隈言道 書軸	49
日書62	大隈言道 六曲屏風	50
日書63	大隈言道・野村望東 二曲屏風	51
日書64	二川相近 四行書軸	52
日書65	二川相近 二行書軸	53
日書66	二川相近 十行書軸	54
日書67	下枝董村「好義」	55
日書68	中林梧竹 漢詩楷書軸	56
日書69	副島種臣 行書軸	57
日書70	副島種臣 蘭絵行書軸	58

# 日書39 かめ い なんめい いちぎょうしよじく 亀井南冥 一行書軸

クE247

(S-239)

軸装

①だいちょうげ  
んこう

(1676~1768)

江戸時代前中期  
の僧。黄檗宗。  
詩文にも優れる。②よしますとう  
どう

(1702~1773)

日本近代医学中  
興の祖。実験医  
学の道を開いた。③ながとみちよ  
うよう

(1732~1766)

江戸時代中期の  
医師。永富独嘯  
庵とも。製糖法  
を世に広める。  
著書『囊語』の  
跋文、『漫遊雜  
記』の序文は南  
冥が書した。④ひえいかん  
亀井南冥が開い  
た学問塾。亀井  
塾とも。⑤かんとうかん  
下級武士や町民  
を対象に徂徠学  
を講じる西学問  
稽古所。

⑥日書 43 参照

⑦じょうまんじ  
福岡市中央区地  
行二丁目にある  
浄土真宗本願寺  
派の寺院。南冥  
の母、徳は住職  
の娘であった。

本軸は、亀井南冥（寛保三年：1743～文化十一年：1814）の書である。南冥は江戸時代中期、福岡県黒田藩の儒医、書家であり詩文の名も高く、筑前福岡早良郡姪浜浦（現在の福岡市西区姪の浜三丁目の北部）に生まれた。名は魯，字は道済または道載，通称は主水，号は南溟，のちに南冥と改め，別号に信夫翁，狂念居士，苞楼がある。

父の聴因は田舎出の町医者として苦勞し，医術よりも南冥の文才に望みを託し，14歳，肥前の僧大潮元皓<sup>①</sup>について学ばせた。20歳，京都の吉益東洞<sup>②</sup>，大阪の永富朝陽<sup>③</sup>を歴訪し，朝陽の門人となる。朝陽との出会いは，極めて重要なものであった。南冥は，朝陽が著した『囊語』の跋文を書き，朝陽が東海において名声を得て広く流布されると同時に，南冥の名もその能力を識者に認められた。22歳，福岡唐人町に転居し，医業のかたわら蜚英館<sup>④</sup>を興こして儒学を講じた。36歳，福岡藩主黒田治之の命により儒員に選ばれ，42歳，藩に甘棠館<sup>⑤</sup>が新設されるや，その祭酒となり，東学と対抗するに至る。当時，南冥の詩才は西海第一と称せられ，徂徠学復興の有力な指導者となった。しかし，終始東学との軋轢がたえず，その豪放な言動に対する反感も高まり，寛政四年（1792）七月，祭酒の地位を追われ，蟄居謹慎の身となる。嫡男昭陽<sup>⑥</sup>によって小規模に経営されていた甘棠館は，同十年，類焼を機に廃校となった。

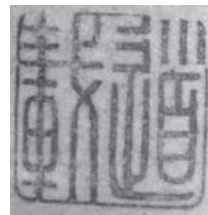
南冥の著述としては，主著『論語語由』，『語由補遺』，医書『南冥問答』，詩作『南冥詩集』のほか，『決々余響』『肥後物語』『半夜話』『金印弁』などがあり，幾種かの詩集は，写本として各地に残存する。

『金印弁』は，南冥自身が福岡藩に提出した，志賀島から発見された金印の鑑定を裏付けた存寄書（ぞんじよりがき）である。この他に，『奉書（題無し）』と『金印弁或問』を提出した。『奉書』には，「唐土の書に本朝を倭奴国と有之候，委字は倭字を略したる者と相見申候」（『儒学者 亀井南冥 ここが偉かった』参照）と記されており，金印解釈の核心をつくものである。『金印弁』には，金印の見取り図と押型，中国王朝への来貢者に印綬授与の制度が存在したこと，金印の文字から後漢の光武帝からの授与であること，形態・篆刻が『集古印譜』所載の漢印古印から本物と断定したこと，中国の文字が日本に伝わった最初であることなど，考証した結果を示している。

文化十一年，72歳の時，隠宅で焚死し，浄満寺<sup>⑦</sup>に葬られた。

本軸の釈文は「詩思秋清青桂花 南冥陳人」である。作品全体の大きさは，縦191.3cm×横45cmで，紙本部分は，縦129cm×横29.1cm。落款印は「亀井魯印（白文）」（縦2.5cm×横2.7cm），「道載（朱文）」（縦2.8cm×横2.8cm）が押捺されている。文字には肥瘦・大小の変化があり，均整のとれた作品である。

〈江頭〉





## 日書40 亀井南冥 行草書二行軸

クE112 S43  
軸装

①こいしげん  
しゅん  
(1743~1809)  
江戸時代後期の  
蘭学者・蘭方医。  
『平次郎 臓図』  
など、解剖絵巻  
を残した。

②おだこうしゅ  
く  
(1746~1801)  
江戸時代中後期  
の長門長府藩士。  
儒者。

③むらいきんざ  
ん  
(1733~1815)  
江戸時代中後期  
の古方派医師。  
字は、大年。通  
称、椿寿。

④ひろせたんそ  
う  
(1782~1856)  
日書 54 参照。

⑤そらいがく  
江戸中期の儒者  
である荻生徂徠  
(1666~1728)  
が唱えた儒学思  
想。

⑥じゅりんひょ  
う  
広瀬淡窓が著し  
た江戸時代の  
「儒風」を四期  
にわけて評した  
もの。

⑦かいきゅうろ  
うひっき  
広瀬淡窓が著し  
た自叙伝。

この作品を書いた亀井南冥は、大阪の小石元俊<sup>①</sup>、長府の小田亨叔<sup>②</sup>と並び、永富朝陽の三傑と称された人物である。南冥は儒者として知られたが、当時「肥に椿寿あり、筑に南冥あり」とも呼ばれ、肥後の村井琴山<sup>③</sup>と並び称された。肥後、筑前はもとより、昭陽の門下生である広瀬淡窓<sup>④</sup>を通じて、九州徂徠学<sup>⑤</sup>の重鎮であった。

淡窓は『儒林評<sup>⑥</sup>』で「南冥ハ氣象英邁ニシテ、眼光人ヲ射ル人ナリ。尊貴ノ人ニ屈セズ、直言シテ媚ビルコトナシ。是ヲ以テ人ニ忌ママレ、罪ヲ得テ蟄居スルコト二十余年ニシテ終ワレリ。晩年心疾発スルニ至ル。是ヲ以テ誹リヲ世ニ招キケリ。南冥ノ人トナリ、細行ヲ検セズ。南冥ハ詩長ズル人ナリ。学問ハアマリ博キコトナシ」と評し、また『懷旧樓筆記<sup>⑦</sup>』では、「ソモソモ先生ノ人トナリ、伸ブルコトヲ能クスレドモ、屈スルコトヲ能クセズ。物ニ克ツニ勇ニシテ己ニ克ツニ怯シ。(略)元俊ハ独嘯庵ノ門人ニシテ、南冥ノ親友ナリ。(略)元俊ガ曰ハク、道載ヲ京師ナドノ儒者ト、一樣ニ思フベカラズ。誠ニ猛虎ノ如クナル者ナリトゾ。其若カリシ時ノ豪氣、想像スルニ堪ヘタリ。」と評し、南冥は猛虎のごとく豪快な人物であったことを述べている。

豪放磊落な性格で、学生に対しては自由放任で個性を尊重し、長所發揮を旨とした。南冥の文名は藩の内外に高く鳴りひびき「関西無双」と評せられたほどであった。

本軸の大きさは、縦 194.3cm×横 59.5cm である。紙本部分は縦 120cm×横 45.5cm。絹本に書かれている。

釈文は以下の通り。

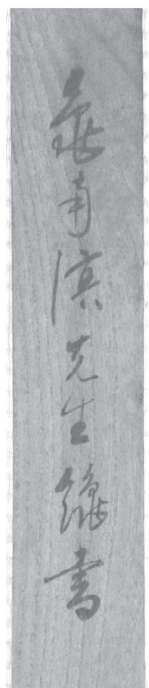
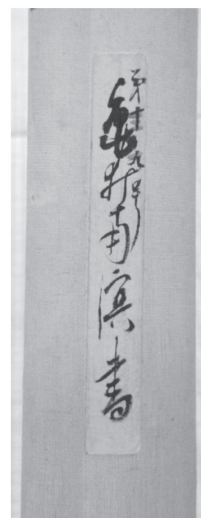
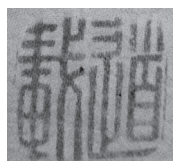
碧落千帆立／玄冥一鏡平

為亀石主人写六十七翁狂念居士

引首印は「白髪書生（白文）」(3.3cm×2.2cm)、落款印は「亀井魯印（白文）」(2.5cm×2.7cm)、「道載（朱文）」(2.8cm×2.8cm)が押捺されている。軸箱には、「亀南冥先生繩書」、題箋には、「第十九号 亀井南冥書」と記載がある。

落款に「六十七翁」とあることから、文化七年（1810）の作である。

竹筆で書かれたかと思われる。その筆触や、渴筆でもぐいぐいとおし進めていく豪快な筆致には、その豪放な人となりが見れているかのようである。 〈江頭〉





# 日書41 かめ い なんめい ゆうりゅう 亀井南冥 游龍

クE107

クE103

S42

軸装

①日書 40 参照。

②日書 39 参照。

本軸は、亀井南冥が書したものである。

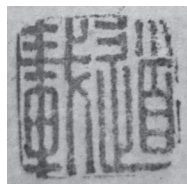
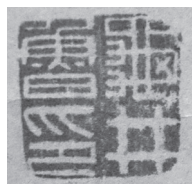
作品全体の大きさは、縦 149cm×横 59.5cm で、紙本部分は、縦 28.5cm×横 53cm。引首印は「白髪書生」（縦 2.7cm×横 2cm），落款印は「亀井魯印（白文）」（縦 2.5cm×横 2.7cm），「道載（朱文）」（縦 2.8cm×横 2.8cm）が押捺されている。日書 39、日書 40 と同様の落款印の使用と見えるが、押捺の状態はやや異なっている。

積文は「游龍 南冥居士」である。

「游龍」は、「舞ひ昇る龍。天翔ける龍。」、「姿態の美を喩へて言ふ。」、「馬などの速かに駆けるさまをたとへて言ふ。」（『大漢和辭典 卷七』参照）であるが、日書 40 と同様に竹筆で書かれたと考えられ、落款は別の細筆で書かれている。線の潤渾やリズムミカルな筆運びが感じられ、明るい印象を受ける作である。

南冥は 70 歳頃から、本軸の引首印からも窺えるように、自ら「白髪書生」と称していた。日書 40 の作品が書かれた四年後の文化十一年（1814）に、隠宅からの原因不明の出火のため焼死。昭陽は火を犯して南冥の居室に救済に向かったが、呼びかけに答える者はいなかった。南冥は牆下にうつぶせで臥せており、すでに息絶えていた。自ら火を放ったのか、自ら火に身を投じたのかは定かではないが、その一部始終は、『懷旧樓筆記<sup>①</sup>』に記述がある。その後浄満寺<sup>②</sup>に葬られ、建てられた墓碑の正面には、「白髪書童南冥亀先生之墓」と刻まれている。これは、南冥生前の筆跡である。浄満寺の墓地には、南冥夫人と息子の昭陽を始め、亀井一族の墓碑が多数ある。

〈江頭〉



南冥の墓

## 日書42 かめ い なんめい ぎょうそうしよ ご ぎょうじく 亀井南冥 行草書五行軸

クE228 S63

軸装

### ①だざいふひ

福岡県太宰府市  
観音寺4丁目に  
建碑されている。

### ②しょうこしそ う

価値ある生活は  
古代にあるとし  
て、古代の文物・  
制度を規範とす  
る中国の支配的  
な思想。

### ③おかのがた しろしまひ

現在の遠賀郡大  
島が藩領となる  
に至る次第を述  
べ、その地の漁  
民の大功を顕賞  
するための碑。  
天明七年(1787)  
に南冥が撰文し、  
曇栄が書した。  
拓本と写本が現  
存する。

### ④なんめいきん ほのひ

福岡市中央区地  
行二丁目の浄満  
寺内に建碑され  
ている。

本軸は、亀井南冥の書である。

本軸の大きさは、縦 205cm×横 70.5cm であり、紙本部分の大きさは縦 136.3cm×横 57cm。釈文は、南冥作「奉送公族大夫建中君子播陽致祭曩祖濃州公之墓二首」(『亀井南冥昭陽全集 第八巻・上』参照)のうちの一首目であると考えられる。

奉使山陽賦采繫千年檜柏舊家  
園碑陰絶見前朝字瓜瓞遙推奕  
世恩竜野帰雲寒積氣鶴林斜日  
静黄昏攀壇試薦剛池水髣髴  
英靈降海門

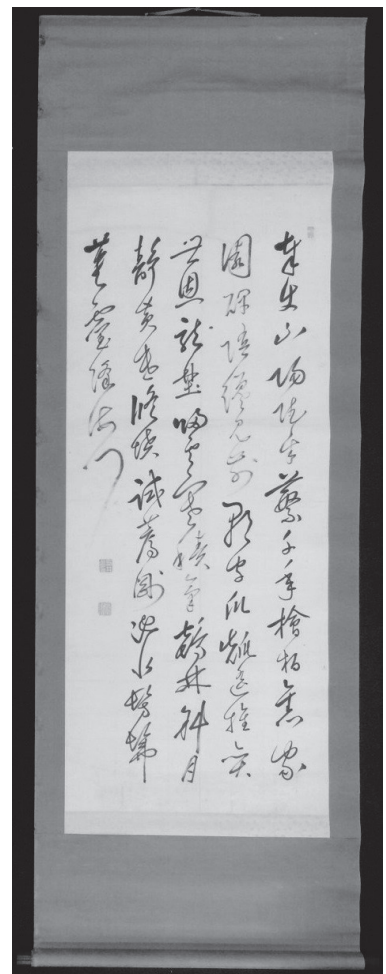
しかし、三行目最尾の「日」は「月」、四行目四、五行目の「攀壇」は「修墳」と書かれている。

引首印は「□萬支<sup>紅</sup>」(1.3cm×2.5cm)、落款印は「亀井魯印(白文)」(2.5cm×2.5cm)、「道載(朱文)」(2.5cm×2.5cm)が押捺されている。

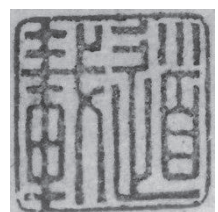
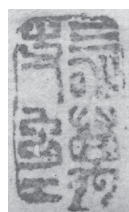
この作品は、横画の右上がりの強さが特徴的で、文字造形や運筆・緩急の変化に富んでいる。文字の大きさ以上にスケールが大きく、余白の美しさを感じられる書である。

ここで、南冥が撰書した「大宰府碑<sup>①</sup>」について述べたい。最尾の年記署名部分に「寛政改元己酉仲冬」とあることから、1789年に書されたものであるが、すぐに建碑には至らなかった。これは南冥一人の発意で、かねてから構想を温めていたものと考えられる。本碑の建造費に関しては、博多の富商ら、平山鼎、山際脊、秋枝廣成が出資を快諾したが、飯司城、天司計の二役人は、商人に頼らず、自分たちの出資でするようにと話が進まなかった。藩当局に建碑許可を求めた結果は、翌年春に「意は嘉すべきも建碑は必ずしも要しない」との不許可の返答であった。藩当局が、南冥の尚古思想<sup>②</sup>に基づく勤王精神の萌芽を危惧したからだと考えられている。天明七年(1787)の岡縣白嶋碑<sup>③</sup>の破却処分が始まる南冥の藩当局への憤慨は御し難いものであった。その後、備後の山室箕陽の求めに応じて筆写し、「この企てに賛同した郡奉行配下の佐鶴亭の求めに応じ法帖に記し、趣旨を世に伝えんとした。」(『亀井南冥昭陽全集 第一巻』参照)悲運の中に埋没しかけたこの碑が復活したのは、実に南冥没後百年を経た大正三年(1914)であった。この年に南冥欽慕の碑<sup>④</sup>と大宰府碑が、亀井門下生を中心とした有志の拠金で建てられたのであった。

〈江頭〉



大宰府碑





日書43 かめ い しょうよう いちぎょうしよじく 亀井昭陽 一行書軸

クE244

軸装

①えんのらんせん

(1751~1809)

江戸中期の修験

者、儒者。本姓

島田氏、名は観

字は道甫、通称

右京、藍泉また

は興山と号し、

修験道の祖、役

小角の流れをく

むと称して役を

姓とした。福岡

の亀井南冥とは

終生友誼をもっ

た。著作に『藍

泉集』など。

②こがこくどう

(1778~1836)

江戸時代後期の

朱子学者、佐賀

藩年寄。古賀精

里の長男。諱は

燾。字は溥卿、

号は穀堂。通称

は敬一、太郎右

衛門、一左衛門、

修理、藤馬。

③かんせいいが

くのきん

1790年、寛政

の改革の一環と

して、江戸幕府

が昌平坂学問所

に対し、朱子学

以外を異学とし、

その教授を禁止

したこと。

亀井昭陽は安永二年八月十一日（1773年9月27日）～天保七年五月十七日（1836年6月30日）は、江戸時代後期の古文辞学系の儒学者である。父・亀井南冥の学業を継ぎ、徂徠学を基本に朱子学を取り入れて家学である亀門学を大成した。諱は昱（いく）、字は元鳳（げんぼう）、通称は昱太郎、昭陽はその号である。別号に空石、月窟、天山遯者、幽人などがある。

福岡藩の儒医である亀井南冥の長男として、筑前国唐人町に生まれる。若くして父の親友である岩国の役藍泉<sup>①</sup>の塾に入り、帰国した年に『成国治要』を著し治国策を論じた。南冥とともに「政事」と「学問」の一致を説き、学問における政治的实践を重んじる点において徂徠学の影響下にあるが、徂徠学を絶対視していない。若くから頼山陽と交流し、佐賀の古賀穀堂<sup>②</sup>とともに、「文政の三太郎」と称された（山陽の通称は久太郎、昭陽が昱太郎、穀堂は壽太郎と称された）。寛政四年（1792）、朱子学を正学とし古文辞学などの古学を規制する寛政異学の禁<sup>③</sup>の余波が福岡藩にも及び、南冥が藩校甘棠館の祭酒（学長）を罷免されたことを受けて家督を継ぎ、わずか20歳にして福岡藩の藩儒となった。

その後、亀門学を西海では右に出るものなしと言われる程に発展させた。寛政十年（1798）、唐人町の商家から発した大火により甘棠館校舎が焼失し廃校となり、免官となる。その後は城代組平士として勤めながら、江戸で南冥著の『論語語由』の開板に従事し、また自身も経学研究に没頭し『周易僭考』、『毛詩考』、『論語語由述志』等、多数の著述を残した。

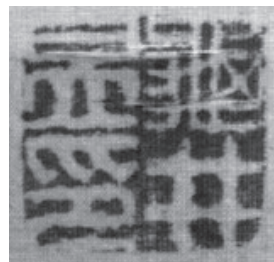
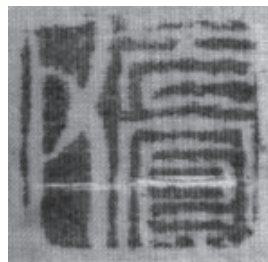
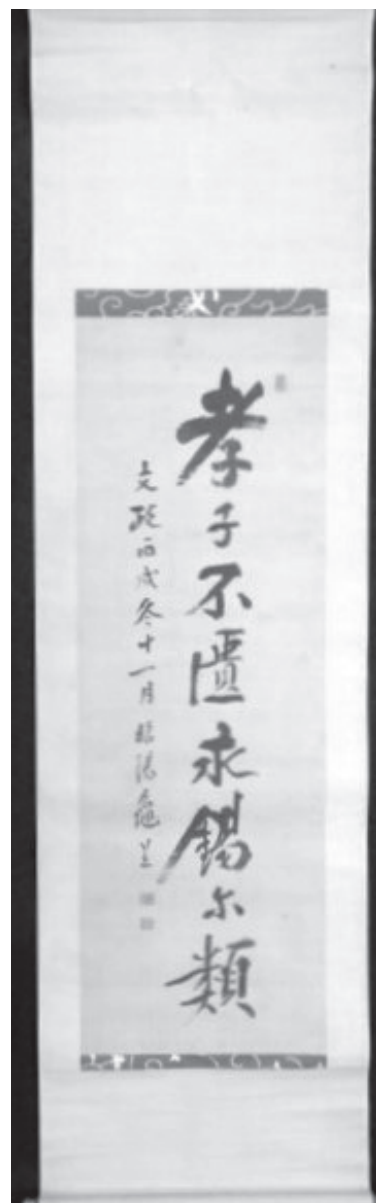
一方で、私塾として亀井塾を開き、広瀬淡窓、広瀬旭莊らを育てた。

本軸は、縦189cm×横52cm（紙本部分縦116.3cm×39cm）引首印は「通世无悶」（2.5cm×1.5cm）落款印は「亀井昱印」（2.1cm×2.1cm）、「元鳳父」（2cm×2cm）である。

釈文は以下の通りである。

「孝子不置永錫尔（爾）類 文政丙戌冬十一月昭陽亀昱」

『詩経』大雅、既醉の詩句が書かれており、「孝子、置（とほ）しからず、永（なが）く爾（なんじ）に類を錫（賜・たま）う。」と読む。





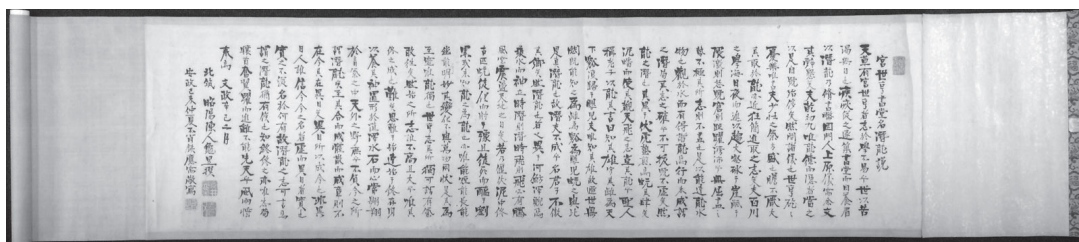
日書44 <sup>かめ い ようしゅう かめ い しょうようせん</sup> 亀井陽洲 亀井昭陽撰 宮世亨書堂名潜龍説

クE224

軸装

① かめいよう  
しゅう  
昭陽の次男。字  
は鐵。通称は鐵  
次郎。陽洲と号  
した。

②日書 43 参照。



本作品の筆者は亀井陽洲<sup>①</sup>（文化五年：1808～明治九年：1876）である。また、本文は陽洲の叔父にあたる亀井昭陽<sup>②</sup>が撰文したものである。

縦 31cm×横 149cm、紙面部分縦 28.4cm×横 108cm で、釈文は以下の通りである。

印<sup>A</sup>

宮世亨書堂名潜龍説

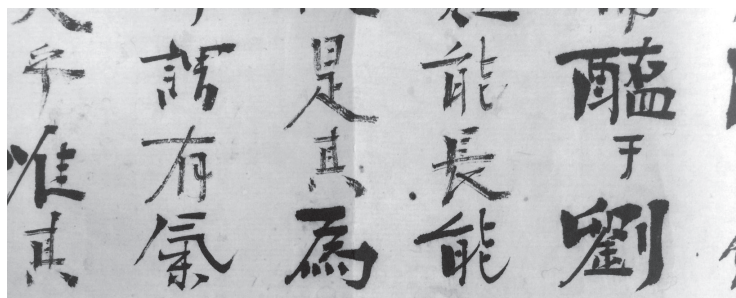
天草有宮世亨者志於學不易乎世以苦 渴無日也疾疾從之遂築書堂而自養眉 以潜龍乃脩書幣因門人上原儀需余文 其辭懇矣夫乾初九唯龍德而隱者當之 以是自號殆修矣然問諸儀也世亨屹々 憂樂唯書夫少壯之氣方盛也膽不厭大 其取於龍亦近狂簡進取之志矣夫百川 之學海日夜而進以趨大壑砥于崖觚于 隈激則怒號奮則距躍滂沛乎無屈盡之 勢不極其所志則不盡也是以能達龍水 物也觀於水而有得諸龍焉行而未成謂 之潜苟其志之確乎不可拔號不虛矣然 龍之潜也其異于伏虎蟄熊焉虻其肆矣 泥蟠而使其觀天飛之志豈其龍乎聖人 稱老子以龍其言曰知其雄守其雌為天 下谿復歸于嬰兒夫唯知其雄故遯世無 悶既能知之為雌為谿為嬰兒焉之與比 是真潜龍也故潜夫不成乎名君子不傲 其鄉矣然潜龍也者又異于河魴澤鯢焉 乘水而神立時潜則潛時飛則飛必有騰 風雲震盪天地之日矣若乃偃伏泥中終 古匹虻徒可而射于豫且徒死而醢于劉 累我未知龍之為龍也亦唯能短能長能 幽能明妙其變化不與萬物同狀是其為 至靈唯龍獨也世亨志其所獨可謂有氣 敢往矣然始之所志誰不高且大乎唯其 終之成也難矣思難于始達始于終存身 以養其神置形於菹澤水石而心常翱翔 於青氣之中天外之野庶乎不負今之所 謂潜龍矣至其合而成體散而成章則不 在今其在異日矣異日所以成今成非異 日人誰信今今之名者虛而異日者實也 實之不從名於何有故潜龍之志可言焉 謂之潜龍猶有俟也知終終之亦唯志苟 驤首奮翼躍而進雖不能先天乎風雨將 奉焉 文政辛巳二月

北筑 昭陽陳人亀昱撰 印<sup>B</sup> 印<sup>C</sup>

安政己未仲夏不肖鉄應需敬寫 印<sup>D</sup>

引首印は縦 2.6cm×横 1.7cm で「遁世无悶（白文）」、落款印は縦 2.1cm×横 2.1cm「亀井昱印（白文）」、縦 2.2cm×横 2.1cm「元鳳父（白文）」、縦 1.7cm×横 1.7cm「亀井鐵印（朱白相間印、「井」字のみ朱文）」である。

〈日高〉



# 日書45 かめ い しょうよう ぎょうしよ に ぎょうじく 亀井昭陽 行書二行軸

クE214

軸装

①かめいだいそ  
う

字は大壮，雲来と号し，通称は昇太郎。南冥，幻庵，昭陽，雲来，大年の五大学者を「亀井五亀」という。

②かめいたいね  
ん

(1777～1812) 名は万，号は天地房。江戸後期の儒者，医師。医を家業とし，詩にたくみだった。遺著に『大年遺稿』。

③たかばおさむ  
(1891～1833)

江戸後期・明治期の教育者，眼科医。本名らん。亀井南冥，昭陽父子に学ぶ。学才すぐれ，亀井少榮，原采蘋とともに亀門の三女傑と呼ばれる。六十歳で死没，福岡公園の十里松原に墓がある。

本軸の筆者は亀井昭陽である。人物については，日書43を参照していただきたい。

昭陽には弟が二人おり，大壮①と大年②といった。両者とも文名があったが昭陽が最も優れている。

亀井家は，儒学者の家系であり，父南冥，父の弟曇栄，昭陽，大壮，大年の五人は五亀と称された。

寛政四年に父南冥が甘棠館館長を罷免され，昭陽が家督を継いだ。寛政十年，唐人町の商家から発した大火の中に甘棠館校舎が焼失したため甘棠館は廃校になり，その後，享和二年，亀井昭陽は私塾である亀井塾を再開した。亀井門下からは，秋月の原古処，豊後日田の儒者広瀬淡窓や博多の興志塾を開いた高場乱③など著名な学者が輩出した。

昭陽は，「父南冥に書道を仕込まれ，初唐の四大家の一人欧阳詢の書を臨書したものや手本として書いた『唐詩考』の法帖が残されている。」（『近世女人の書』参照）と素養として，書技の鍛錬にも力を注いでいた。

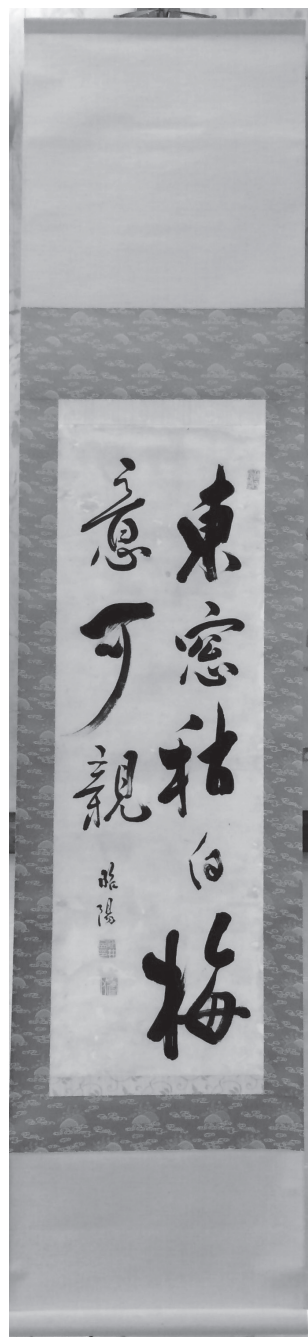
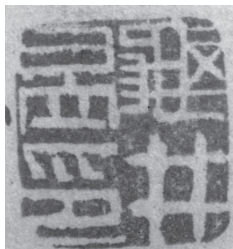
また，「昭陽は『家学小言』を著はして，自分の学問上の立場を明らかにした。昭陽の著述としては『尚書考』『大学考』『中庸考』など五十冊あり，頼山陽が九州に漫遊した時に，昭陽と詩酒徴逐したのであるが，詩文は山陽の方が勝れたが経学においては山陽は到底昭陽に及ぶことはなかった。昭陽は学力においては当時匹敵なる儒教の大家であった」（『大人名事典 第二巻』参照）と，昭陽の学識の深土が知られる。

釈文は以下の通りである。

「東窓枯白梅意可親 昭陽」

本軸の大きさは，縦168.5cm×横37.2cm，紙面部分は縦84cm×27cmであり，引首印は「遁老无悶」（縦2.5cm×横1.5cm），落款印は「亀井昱印」（縦2.3cm×横2cm）「元鳳父」（縦2.3cm×横2cm）である。日書43の一行書軸と同文の印を押捺しているが，文字書格・刀法などからみて，三印ともに異なる印章である。

〈高〉





## 日書46 かめ い しょうよう ぎょうしよいちぎょうじく 亀井昭陽 行書一行軸

クE128

軸装

①日書 39 参照。

本軸は亀井昭陽の書した作品である。

家督を継いだ当初から不遇だった昭陽は、文化六年（1809）、長崎警備のための烽火藩役（筑前国の六つの山の烽火台を一定期間巡回する役目）を命ぜられ、より過酷な境遇に立たされる。しかしながら、持って生まれた資質と常日頃の精進により、任務を遂行しながら『烽火日記』を著したり、その他数多くの著作を残し、名実ともに亀井学の大成者となった。それは、南冥が著した『論語語由』の注釈である『語由述志』などに顕著に現れている。

昭陽が活躍した十八世紀後半から十九世紀中頃になると、儒学は徂徠をはじめ各学派の良いところをまとめて折衷的な学問体系となり、その上個々の学者が各々自由に主張したため、学派で一括りにできなくなってきた。そのなかで昭陽の学問は反徂徠学と位置づけられる場合もある。

昭陽は經典の注釈書や歴史書、詩文書など様々な著作物を残し、代表作品は1978年から次々出版された『亀井南冥・昭陽全集』に収録されている。『全集』は8巻9冊からなり、亀井父子の儒学の成果を全面的に反映するものとなった。

本軸の大きさは、縦194cm×横41cm、紙面部分は縦134cm×横29cm。引首印は「白髪書生」（白文）（縦2.9cm×横2cm）であり、落款印は「亀井昱印」（白文）（縦2.1cm×横2.2cm）、「元鳳」（朱文）（縦2.2cm×横2.3cm）である。引首印は南冥の用印を用いている。



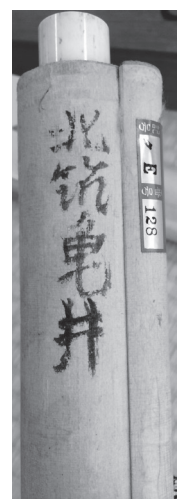
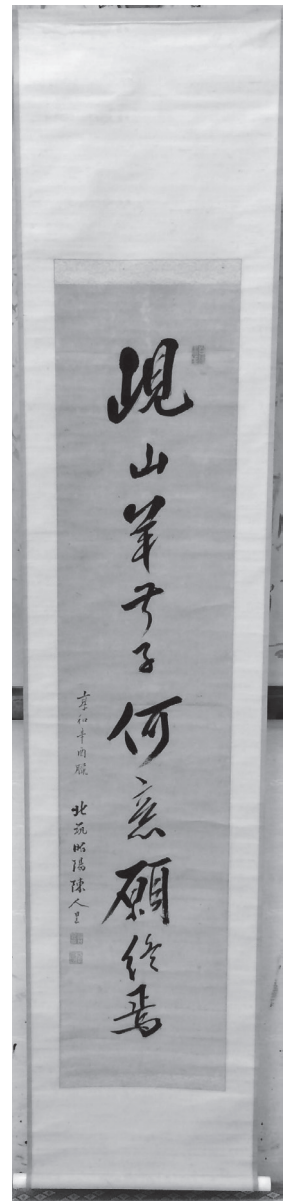
釈文は以下の通りである。

「岷山羊叔子何意願終焉 亭和辛酉臘 北筑昭陽陳人昱」

日書45に引用された『近世女人の書』にみられるように、昭陽の書技の基盤は、父の南冥と欧陽詢の書であったという。この作品においても縦長の造形や、右あがりの書風にその影響が見えるが、大きめに書き出し、書き進むに従って小ぶりに書くという、誠実な書といえよう。

南冥、昭陽の墓は、浄満寺<sup>①</sup>境内にある。

〈高〉





# 日書47 かめ い げんあん げんあんしよじく 亀井幻庵 幻莽書軸

クE223

軸装

①日書 39 参照。

②細川林谷

ほそかわりんこく

(1780~1843)

江戸時代後期の

日本の篆刻家・漢詩人である。

本姓は広瀬、名は潔、字は瘦仙・氷壺、林谷は号で他に林道人・忍冬菴・三生翁・白髮小兒・天然画仙・不可刻斎・有竹家などと号している。通称は春平。讃岐の人。

亀井南冥が秘蔵した「東西南北人」の印（日書 51 掲出）は細川林谷篆刻の銅印である。南冥の死後、息子の亀井昭陽から、原古処、原采蘋、土屋蕭海、長三洲へと伝わり、三洲の長男、長壽吉の手を経て現在は福岡県朝倉市の秋月郷土館に伝承されている。

亀井幻庵（寛延三年：1750～文化十三年：1816）は、福岡の姪浜村に生まれた。儒学者である亀井南冥<sup>①</sup>の弟である。江戸時代後期の僧および儒者で、幻莽、玄菴ともいい、道号は曇栄、諱は宗曄、別号は禅月、龍華、松涛である。

12歳の頃、南冥の師であった僧・大潮に謁見し、その後、南冥の学友である多久（現佐賀県多久市）の僧・知雲にも教えを受けた。その詩文の才能は、「亀井の五亀」を評する人々の間で、「一に曇栄、二に南冥」と賞されるほどであった。

本軸は、縦123cm×横55.3cm（紙面縦27cm×横51cm）であり、釈文は以下の通りである。

多技銅章鍊筆秦篆

工囊中短笛不盈尺名

曰天明五孔通為余三弄

梅花引悠揚悲壯思無

窮鎌府霸迹有無際

薩國風雲想像中君

不聞我有少林無孔鐵

笛<sup>送</sup>□明徹太虛空讃州林谷<sup>②</sup>廣雅伯見過為

余明短笛因短述以謝

兼送其南遊

文化戊辰九月

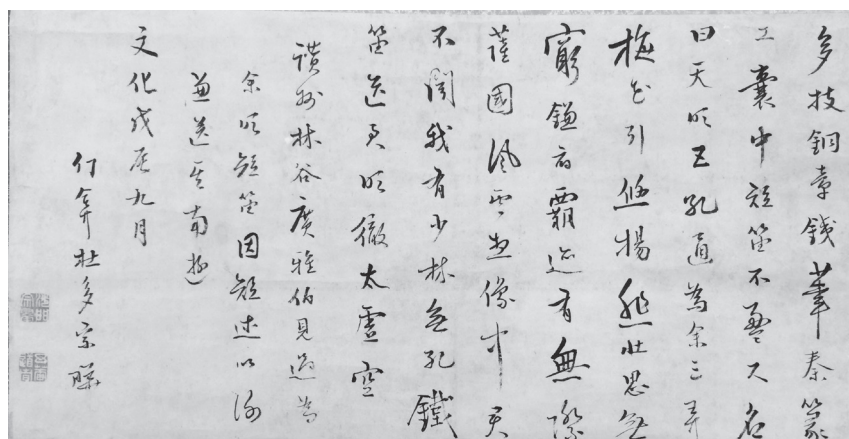
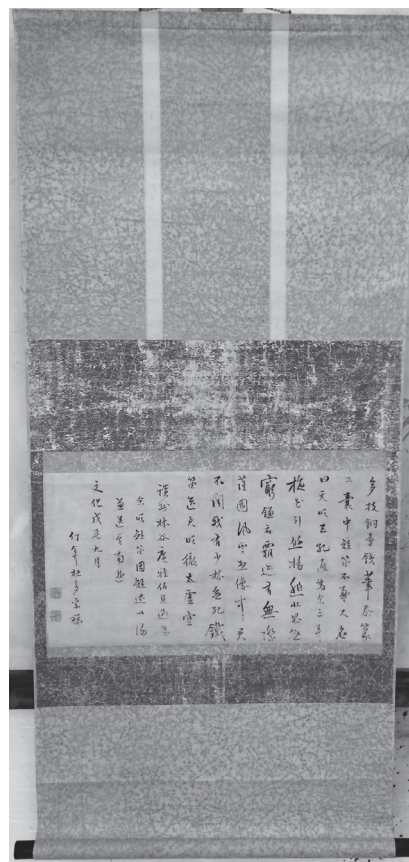
幻莽杜多宗曄

落款印は上下ともに縦1.7cm×横1.7cmで「沙門宗曄（白文）」、「玄菴道者（白文）」が押捺されている。

軸裏には「幻莽書」と書かれており、本軸の名称とした。

本作品は、行草書体で書かれており、字の大小の変化は激しくも、全体としては落ち着いた雰囲気を感じられる作品である。

〈日高〉



# 日書48 亀井幻庵 三行書軸

かめ い げん あん さんぎょうしよじく

クE119

軸装

①日書 39 参照。

本軸の筆者、亀井幻庵は、出家して相国寺で修行後、安永七年（1778）、南冥<sup>①</sup>が藩に召し抱えられたのと同年に、藩主黒田家の菩提寺である崇福寺の住職（第87世）になった。

しかし、寛政四年（1792）、南冥が退任させられると、崇福寺の住職を解かれ、その後は妙楽寺（現福岡市博多区）で隠居生活を送るが、幼少の頃から殊の外仲のよかった南冥との間にはたくさんの往復詩文が残っている。南冥の死後は、文化十三年（1816）に没するまで、亀井家のよき理解者として生涯を全うした。

本軸は、縦 204cm×横 41cm（紙面縦 124.5cm×横 30cm）であり、釈文は以下の通りである。

再顧君何意蕭然一草廬唯甘孤榻坐敢與

二空居竹博人烟遠梅簷午雨疎天尉容

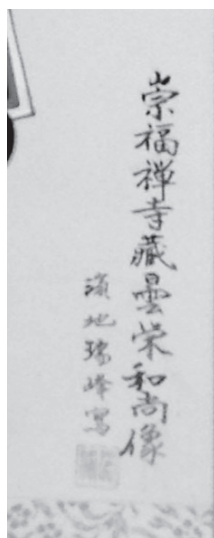
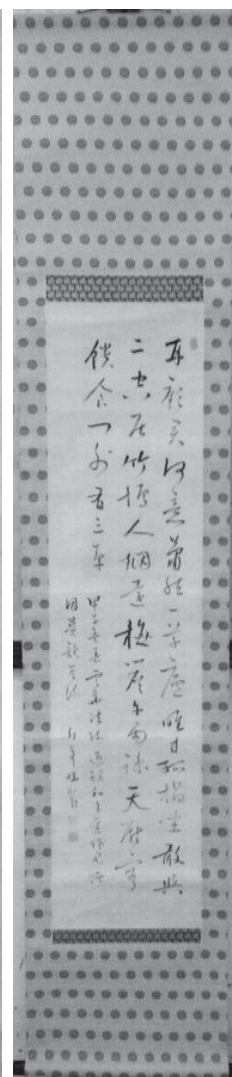
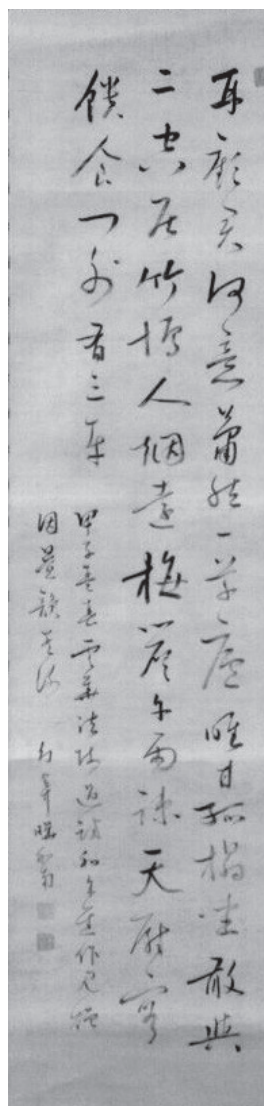
饋食門外有三車

甲子孟春雲華法師過訪和余舊作見贈

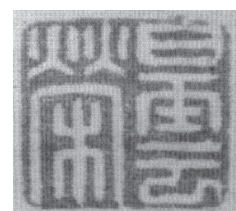
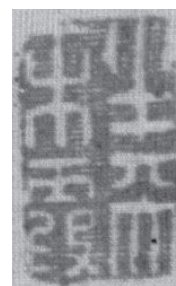
因疊韻若謝 幻菴曄和南

引首印は縦 1.2cm×横 1.3cm「半天末霞（白文）」、落款印は縦 1.8cm×横 1.9cm「竺海宗曄（朱文）」、縦 1.8×横 2cm「曇榮（白文）」が押捺されている。

軸半月には、「筑崇福寺曇榮和尚贈詩 雲華所藏」と書かれている。〈日高〉



「崇福禪寺藏曇榮和尚像」  
能古博物館蔵





# 日書49 かめ い しょうきん が ちくじく 亀井小琴 画竹軸

クE245

軸装

①日書 43 参照。

②日書 39 参照。

③みとまげんご  
(1789～1852)

江戸時代後期の  
医師，儒者。名  
は源，復。字は，  
応竜。別号に雷  
首山人。亀井雷  
首のこと。亀井  
昭陽に学び，小  
琴の婿となる。

亀井小琴（寛政十年：1798～安政四年：1857）は，筑前の福岡に生まれた。儒学者である亀井昭陽①の長女であり，祖父は亀井南冥②。江戸時代末期，天保のころの漢詩人および画家で，名を友といい，小琴はその字である。書画においては少槩を別号としている。

15歳で邸内に居室（窈窕邸）を与えられ，これを別号とした。文化十三年（1816），父の門弟であった三苦源吾③と結婚し，文政七年（1824），三苦は昭陽の求めで亀井姓を名乗り分家した。源吾は医業のかたわら儒学を子弟に教え，小琴はこれを補佐した。

幼少のころより父，祖父の薫陶を受けたことにより漢詩を作ることに秀で，書も能くした。また画を描くことも巧みで，墨竹図を能くした。本軸においてもその巧みさが見事に表現されている。

小琴の書は，細身で鋭い書きぶりが特徴とされているが，画においては，力強い打ち込みで大胆な図柄の画を描き，独自の世界を開拓した。

また，福岡の能古博物館には多くの作品が伝わっている。

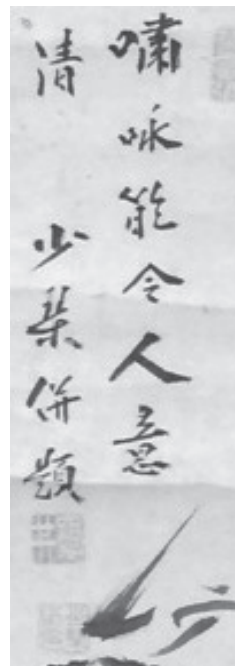
本軸は，縦 179cm×横 36cm（紙面縦 98cm×横 28cm）であり，画題は以下の通りである。

嘯咏能令人意清  
少槩併題

引首印は縦 2.4cm×横 0.9cm で「茶當酒（白文）」，落款印は上下ともに縦 1.6cm×横 1.6cm，「亀井（白文）」，「少槩之印（朱文）」が押捺されている。

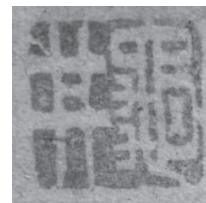
紙面全体に傷み，軸全体に折れが見受けられる。

〈日高〉



「於多福図」 「少槩四君子画・雷首賛」

上掲ともに，能古博物館蔵





# 日書50 亀井小琴 三行書軸

かめ い しょうきん さんぎょうしよじく

クE223

軸装

①日書 53 参照。

本作品は、縦 202cm×横 41.5cm、紙面部分縦 119.5cm×横 28.5cm で、釈文は以下の通りである。

星房夜静蕙蘭芳客是農夫大父行

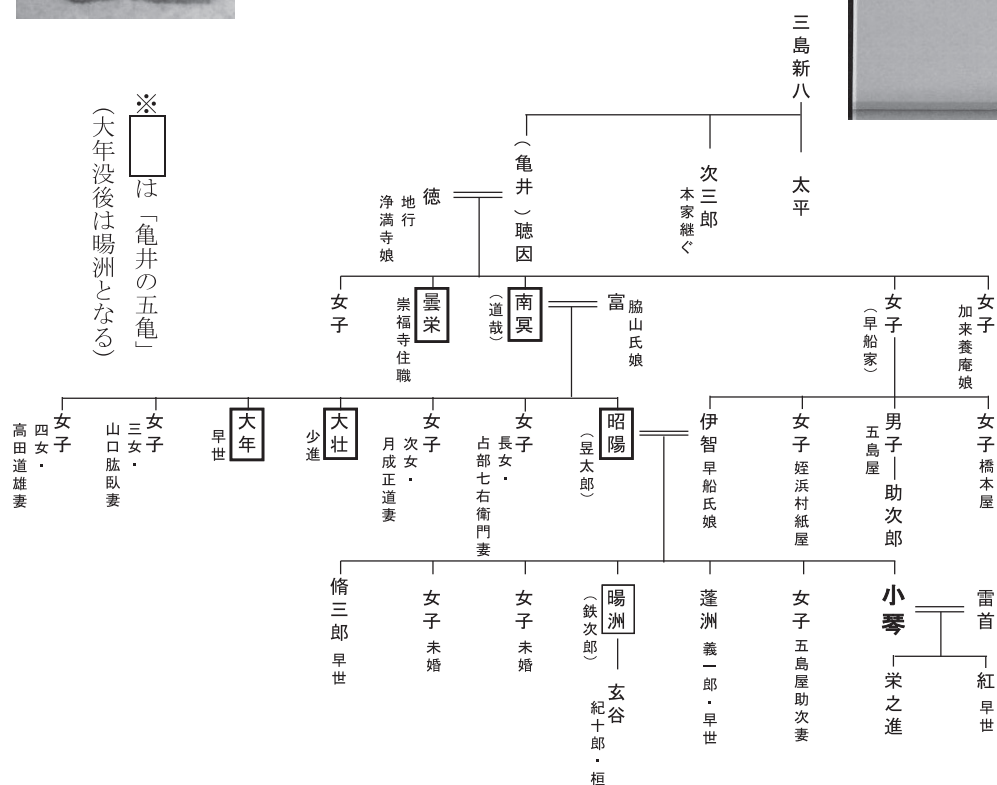
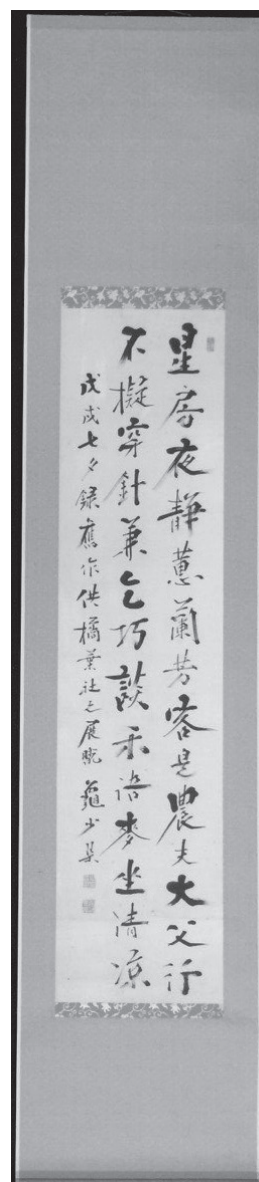
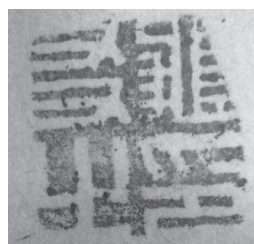
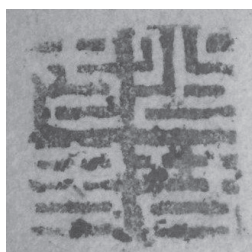
不擬穿針兼乞巧談禾語麥(麦)坐清凉(涼)

戊戌七夕録舊(旧)作供橘葉社之展翫亀少榮

引首印は縦 2.5cm×横 1.2cm で「[印文不詳] (白文)」, 落款印は縦 2.0cm×横 2.0cm 「亀友之印 (白文, 回文)」, 縦 2.0cm×横 2.0cm 「少榮女史 (白文)」が押捺されている。

亀井一族は仲睦まじく、南冥、その弟の幻庵(曇栄)、長男の昭陽、次男の雲来(大壮)、三男の大年を世人は親しみを込めて「亀井の五亀」と呼んだ。昭陽の長女である小琴は、秋月の原采蘋<sup>①</sup>と名を等しくする才媛であり、次男の暘洲は幕末の激動期を乗り切って亀井塾を守った。九州儒学界の隆盛に大きく貢献し、100 年にも及んだ亀井塾の存在価値ははかり知れないほど大きい。

〈日高〉



# 日書51 はら こしょ てんそんじく 原古処 天孫軸

元番号なし

①はらはくけい  
(1794~1828)

江戸時代後期の儒者。名は種英。別号に孟潜。寛政六年（1月）生まれ。原古処の長男。原采蘋の兄。筑前秋月藩士。22歳で家督をつぐ。病弱のため33歳で隠居。文政十一年（6月5日）死去。35歳。

②日書 53 参照。

③日書 42 参照。

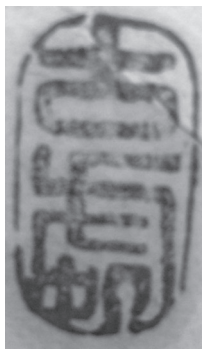
④くろだ ながのぶ  
(1765~1807)  
筑前秋月藩の第8代藩主。

本軸の筆者である原古処（明和四年：1767～文政十年：1827）は、本姓を手塚といい、名は叔燁，字は士萌，通称は震平と称した。原白圭<sup>①</sup>，原采蘋<sup>②</sup>の父。秋月の文化の中心人物として，藩学振興のために尽くした儒学者であり，詩人であり，国学にも深い造詣を示した人である。

筑前国秋月藩士，手塚辰詮の次男として生まれる。のちに秋月藩儒官の原坦斎の養子となる。幼少より利発で学問を好み，原家に入った古処は18歳のとき藩命によって福岡の儒学者亀井南冥<sup>③</sup>の甘棠館に入門した。南冥の門下生達の中でも彼は特に優秀な生徒であった。養父坦斎の罹病により三年足らずで秋月に戻り，家業を継いで藩校稽古館の訓導となったが，その後も亀井南冥に示教を受け続けた。古処は大変優れた漢詩人でもあり，当時の秋月藩主（黒田長舒<sup>④</sup>）の古処への信任も篤かった。文化二年，黒田長舒の許可を得て屋敷地を拝領し，新たに私塾「古処山」堂を開いた。

著作には『古処山堂詩稿』『古処山樵詩集』『臥雪余稿』などがある。文政十年（1827）61歳で没し，秋月西念寺に葬られた。墓石の文字は，詩友の頼山陽の筆と伝えられる。

本軸の大きさは，縦193.5cm×横33cm，紙面部分は縦108cm×22cmであり，引首印は「古処（朱文）」（縦2.1cm×横1.2cm），落款印は「原震平印（白文，回文）」（縦2cm×横2cm）「士萌（朱文）」（縦2cm×横2cm）である。

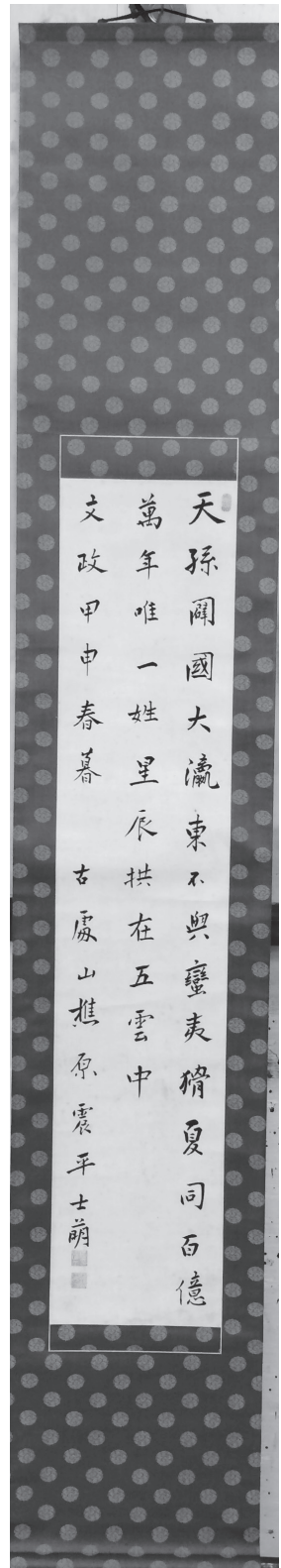


釈文は，

「天孫闢國<sup>(国)</sup>大瀛東不與蠻夷<sup>(蛮)</sup>猾夏同百億  
萬<sup>(万)</sup>年唯一姓星辰拱在五雲中文政甲申春暮 古処<sup>(処)</sup>  
山樵原震平士萌」

であり，筆画の強靱な線から彼の固い意志を感じる。

〈高〉



## 日書52 はら こ しょ しゅうちくじく 原古処 脩竹軸

クE5

軸装

①出典『原古処・  
白圭・采蘋小傳  
及詩鈔』



原古処(図1)①

本軸の筆者は原古処である。(日書51参照)  
原家に入った古処は18歳のとき藩命によって福岡の儒学者の優秀を認められ、南冥も頗る着目して愛重し、甘棠館に入門するが、すぐに才能を現して、其才学王の一人と称賛されるようになった。  
原古処は、詩人としても名声が高く、47歳の時に漢詩の世界に没入して、恩師亀井南冥も古処の詩人としての才能を高く評価した。古処の遺した日記や紀行文によると、恩師南冥の形見の「東西南北人」印を携えて、各地を遊歴していろいろな文人墨客と交友し、酒を酌み交わし漢詩を朗詠して悠々の日々を過ごしていたという。特に広瀬淡窓や頼山陽とは親交が深く、相互に宛てた書簡が多く残っている。

文政十年乙亥正月二十二日没し、享年61歳であった。原古処の墓は西念寺にあり、大きな花崗岩に「原古処先生之墓」の文字が刻されている。書は頼山陽の筆によるものであるが、墓碑側面には広瀬淡窓作の漢詩が刻まれている。この墓石は安政五年に采蘋が改造したもので、墓前に石燈籠を建て、そこには、「安政五年戊午采蘋建之」と刻されている。

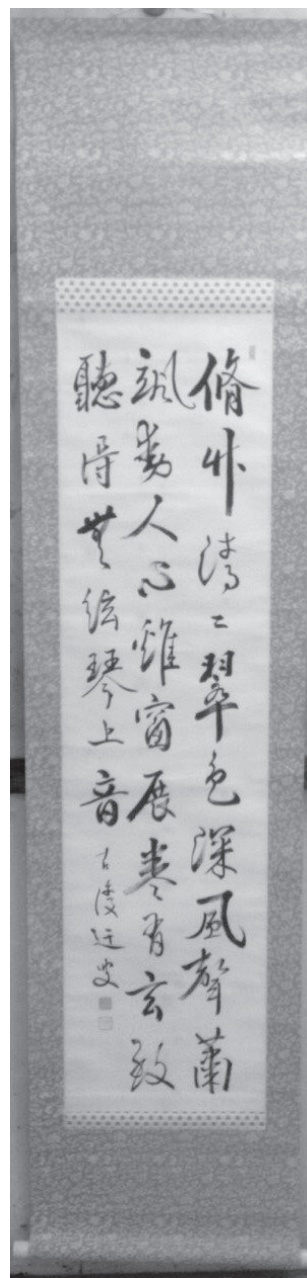
古処はその墓に関して一通の遺言書を残している。「我死則子母印・孤犢刀・以飾遺骸・多栽花柳・題詩人原古処墓而可也」という。しかし、古処の墓がこの遺言書通りに建てられたか否かは、今では分からない。当時嫡男、白圭及び養嗣子であった当主がこれを遵奉したという形跡である。(参考：『日本唯一の閨秀詩人 原采蘋』(五、雑事))

釈文は以下の通りである。

「修竹清々翠色深風聲(声)蕭／颯動人心雖窗展卷有玄致／聽得無弦琴上音 古處(処)迂叟」

本軸の大きさは、縦204cm×横46.8cm、紙面部分は縦135cm×34.5cmであり、引首印は「正其心(白文)」(縦2.3cm×横0.9cm)、落款印は「左文右武(白文)」(縦2.3cm×横2.2cm)「字士其(朱文)」(縦2.2cm×横2.3cm)である。

〈高〉





# 日書53 原采蘋 行草書軸

ク E120

軸装

①かんちゃざん  
(1748~1827)

江戸後期の漢詩人。本姓菅波、名は晋師（ときのみり）。備後（びんご）の人。京都の那波魯堂に程朱学を学び、神辺に帰郷して黄葉夕陽村舎を開く。写実を旨とした清新な詩風で知られ、ことに田園詩が名高い。頼山陽の師

②らいさんよう  
(1780~1832)

江戸後期の儒学者、歴史家、漢詩人、書家。名は襄（のぼる）別号は三十六峰外史。著「日本政記」「日本楽府」など。

③やながわせい  
がん

(1789~1858)

江戸後期の漢詩人、美濃の人。名は孟緯、字は公図。神田に玉池吟社を開き優秀な門人が輩出した。著「星巖集」など。

本軸の筆者である原采蘋は（寛政十年：1789～安政六年：1859）江戸後期の女流漢詩人である。名は猷（みち）、別号は霞窓という。「采蘋」の号は、中国最古の詩集『詩経』の「召南」から採られた。秋月藩の儒官、原古処の長女。幼時から才気あらわれ、詩文をよくし、書に巧みで、父から期待され、漢文、詩、書道について教えを受けた。

文政八年、28歳のとき、父の「不許無名入故城」（名無くして故郷に入るを許さず）という詩に送られて専門詩人として自立の道をめざし家を出た。文政十年（1827）に父が没して以後、遺命を果たすため男装帯刀で再び東遊の旅に出た。九州、西国のみならず京阪や江戸房総にまでその足跡は及び、萱茶山①、頼山陽②、梁川星巖③らと応酬し、詩名は大いに高まった。その後江戸に出て浅草で私塾を開き、また弘化四年（1847）南安房方面に遊びその地の文化人と交友した。しかし母の病を聞き帰郷し、私塾を開き子女に教えた。母の没後、九州を巡歴、再び江戸を志したが、62歳で長門国萩で客死した。（参考：『日本女性人名辞典』）

采蘋の人となりは磊落で、酒を好み、恋愛の経験はあったが、生涯独身を通した。「采蘋の父古処の師亀井南冥に大小二顆の愛印あり、大なるは刻して白髪書生と云ふ、小なるは刻して東西南北人と云う。南冥の没後、子昭陽は古処に「東西南北人」を贈り、古処老いて采蘋に伝わった。采蘋即ち帯びて終身之を用いる。」（『原采蘋女史 日本唯一閨秀詩人』より。）

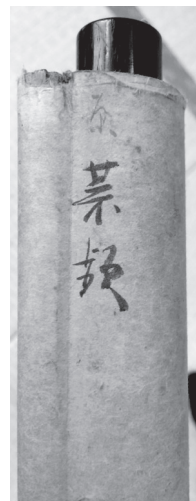
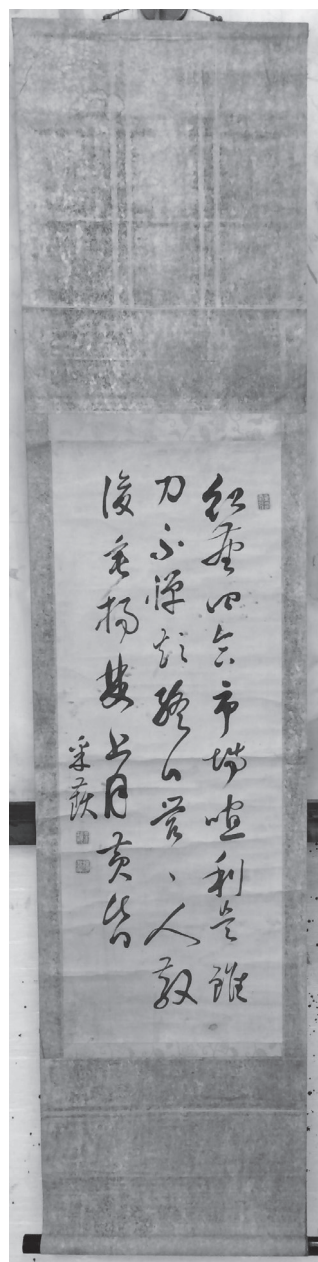
亀井少楽とともに「鎮西（九州の称）二女史」と称され、後輩の高場乱を加えて「亀門三女傑」ともてはやされた。原采蘋、高場乱は男装して、腰に刀を帯びて闊歩し、女儒として立派に自立した。（『近世女人の書』参照。）代表作は、『東遊漫筆』『采蘋詩集』など。

釈文は以下の通りである。

「紅塵四合市場喧利豈雖／刀不憚煩終日營々人散／後垂楊発上月黄昏 采蘋」

本軸の大きさは、縦 160cm×横 36cm、紙面部分は縦 81.5cm×横 29.5cm であり、引首印は「東西南北人（白文）」（縦 2cm×横 1.5cm）、落款印は「采蘋（白文）」（縦 1.5cm×横 1.5cm）「独游（白文）」（縦 1.8cm×横 1.8cm）である。

〈高〉



# 日書54 ひろ せ たん そう ぎょう そう しょ じく 広瀬淡窓 行草書軸

クE121

軸装

①ひろせきよく  
そう

(1807～1863)

江戸時代後期の  
儒学者・漢詩人。  
通称謙吉，名は  
謙，字を吉甫，  
号は初め秋村，  
後に旭莊，梅墩。②ひろせきゅう  
べい

(1790～1871)

江戸時代後期の  
商人，経世家。③ひろせまさお  
(1906～1980)日本の政治家。  
日田市長，衆議  
院議員（自由民  
主党所属）。佐  
藤内閣郵政大臣。

広（廣）瀬淡窓は（天明二年：1782～ 安政三年：1856）は，江戸時代の儒学者で，教育者，漢詩人でもあった。豊後国日田の人。淡窓は号。通称は寅之助のちに求馬（もとめ）。諱は建。字は子基。別号に青溪などである。死後，弟子たちにより文玄先生と諡されたという。筑前国福岡の亀井南冥，亀井昭陽父子の塾に学び，病気で退塾後は独学。末弟に広瀬旭莊①，弟広瀬久兵衛②の子孫に，日田市長で，衆議院議員だった広瀬正雄③，その子息の一人広瀬勝貞は現（平成 15 年～）大分県知事である。

本軸は，縦 177cm×横 39.5cm（紙本部分縦 101.3cm×横 25.9cm）であり，引首印は「淡窓（白文）」（縦 1.5cm×横 1.7cm），落款印は「廣瀬建印（白文）」，「子基氏（朱文）」（縦 1.6cm×横 1.7cm）である。

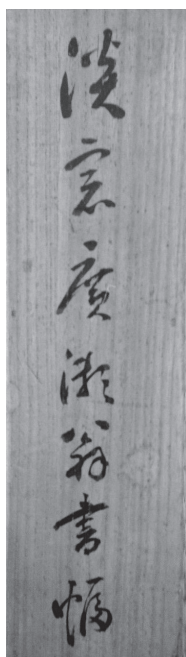
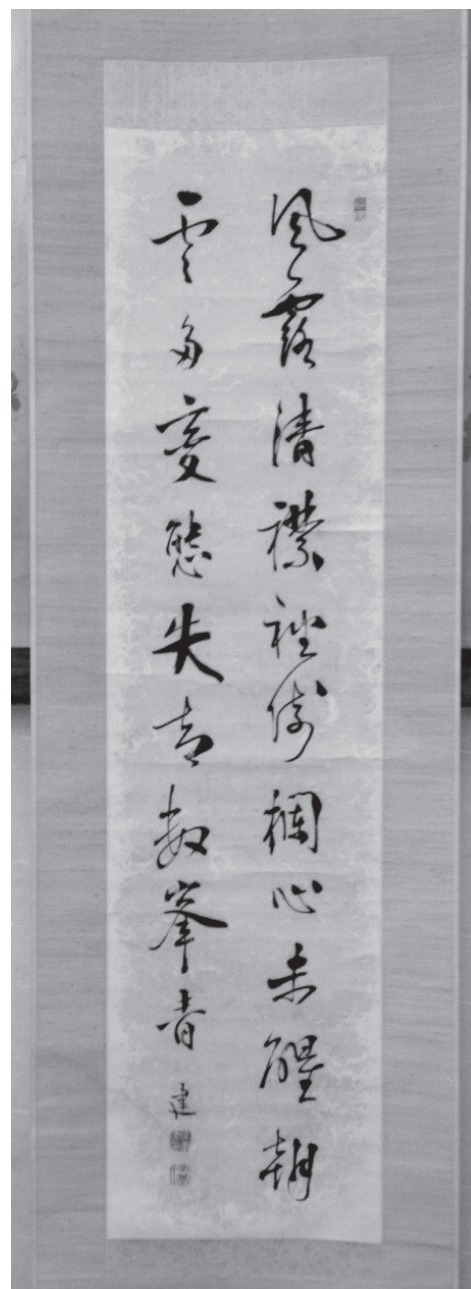
釈文に関しては以下の通りである。

「風露清襟袖 倚欄心未醒 朝雲多変態 失却数峰青 建」

また，箱書きには「淡窓廣瀬翁書幅」と記されている。

日本最大級の私塾と知られる咸宜園を開いたその才は，敬天思想を基盤としたものといわれ，漢詩の評価も高い。その書きぶりも，伝統書法を重んじた清廉な書格をなしたものである。

〈王〉





日書55 <sup>ひろ せきよく そう しょう が ご ぜつ が らん</sup> 広瀬旭荘 書画五絶・画蘭

クE219

軸装

①日書 54 参照。

②日書 54 参照。

③らんがくしゃ  
江戸時代、日本  
において蘭学、  
オランダ語を通  
じて輸入された  
西洋の学問文化  
を修め研究した  
人。

④ゆきよくえん  
(1821~1907)

原名は愈樾（ゆ  
えつ）、字は蔭  
甫、号は曲園。  
浙江德清人。清  
末の学者、文学  
家、経学家、文  
字学家、書法家。

広瀬旭荘（文化四年：1807～文久三年：1863）は江戸時代後期の儒学者、漢詩人である。

通称は謙吉、名は謙、字は吉甫、号は秋村・旭荘・梅墩。豊後国日田郡豆田町の博多屋広瀬三郎右衛門（桃秋）の八男に生まれた。兄は広瀬淡窓<sup>①</sup>、広瀬久兵衛<sup>②</sup>である。

旭荘は記憶力が良く、師の亀井昭陽に「活字典」といわれた。また交遊を好み、各地に多くの旅をした。勤王の志士との交わりも知られ、蘭学者<sup>③</sup>も多くその門を訪れている。詩作にすぐれ、詩文の指導には規範を強えず、個性を尊重した。淡窓が平明な詩を作ったのに対し、旭荘は感情の起伏の激しい、才気横溢した詩を多く残している。旭荘の詩を評して、齊藤松堂は「構想は泉が湧き、潮が打ち上げる様、字句は、球が坂をころげ、馬が駆け降りる様。雲が踊り、風が木の葉を舞上げる様だ」と言い、清代末期の儒者、俞曲園<sup>④</sup>は「東国詩人の冠」と評している。

また著述も多く、特に27歳のときから書き続けた日記『日間瑣事備忘』は、江戸後期を伝える貴重な資料となっている。

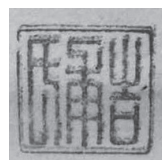
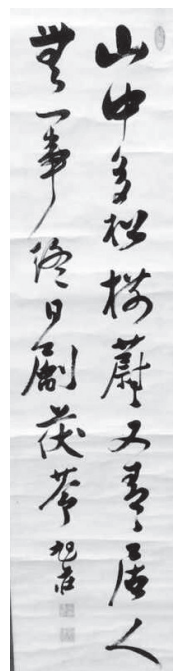
本作品の大きさは、五絶軸は縦182cm×横42.3cm、紙面部分は縦107.3cm×横28.5cmであり、引首印は「知足者（白文）」（縦3.4cm×横1.6cm）、落款印は「廣瀬謙印（白文）」（縦2.4cm×横2.4cm）、「吉甫氏（朱文）」（縦2.4cm×横2.4cm）である。画蘭軸は縦182cm×横42.5cm、紙面部分は縦107.5cm×横29cmであり、引首印は「風月（朱文）」（1.5cm×0.9cm）、落款印は「謙（白文）」（1.1cm×1.1cm）、「吉甫（朱文）」（1.1cm×1.1cm）である。

釈文に関しては以下の通りである。

五絶軸は「山中多松樹／蔚蔚又青青／居人無一事／終日刷茯苓 旭荘」

画蘭軸は「蘭生谷廬人不識／雲在高山自卷舒 旭叟寫（写）」

〈王〉



## 日書56 おおくまことみち よんぎょう わ か じく 大隈言道 四行和歌軸

クE124

軸装

①日書 64～66  
参照。

②日書 54 参照。

③日書 63 参照。

④『日本歴史大  
辞典第2巻』よ  
り引用。

⑤かものまぶち  
(1697～1769)

江戸時代中期の  
国学者・歌人。  
『万葉集』を研  
究し、国学を大  
成させた。

⑥もとおりのり  
なが

(1730～1801)  
江戸時代の国学  
者・文献学者・  
医者。現存する  
日本最古の歴史  
書『古事記』を  
研究し、35年  
かけて『古事記  
伝』44巻を執筆  
した。

大隈言道（寛政十年：1798～明治元年：1868）は、江戸時代後期の歌人である。本姓は清原、通称は米屋清助、萍堂と号した。薬院抱安橋の家に生まれ、幼少時より二川相近<sup>①</sup>の門に入り、歌道・書道を学んだ後、広瀬淡窓<sup>②</sup>に就いて詩を学んだ。

35歳頃になると、従来の歌風から脱却し、独自の歌風を詠みだすようになった。野村望東尼<sup>③</sup>が夫・貞貫と言道に入門したのは、この頃である。晩年には大阪に出たが、その歌風は世に受け入れられず『草徑集』を刊行したのみで帰郷した。明治元年（1868）七月二十九日、福岡今泉の池萍堂にて没した。

歌集に『草徑集』、『戊午集』、『今橋集』、歌論に『ひとりごち』、『こぞのちり』などがある。彼の歌風について森谷秀亮は「構想の洒落輕妙、觀察の微細にして斬新奇抜、鮮明なる印象と潑刺たる生趣とを有してゐるところに特色がある。」<sup>④</sup>と述べている。彼は自らを「天保の歌人」と称し、平安時代以来の伝統から脱しえなかった当時の歌壇の風潮を非難し、賀茂真淵<sup>⑤</sup>の歌風、本居宣長<sup>⑥</sup>の歌論までもを攻撃した。彼の書論には独自の卓見が窺え、「歌は個人の眞實（眞実）の感情の發（発）露なり」といい、現実主義・個性主義に徹した。歌風においても、それまでの歌壇の主流外の新鮮な題材・形式を用いた。

二川相近の編纂した『徒然集』四十一首中の七首は言道の歌である。また、その浄書を担当し、書においても、ひときわ優れていたと考えられる。

本軸は縦105cm×横36.7cm（紙面部分は縦26.3cm×横34cm）で、釈文は以下の通りである。

こひしきか

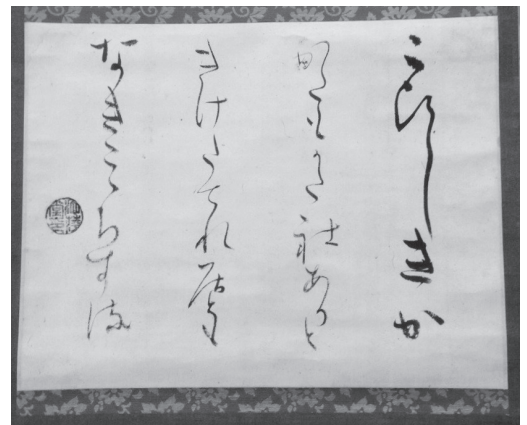
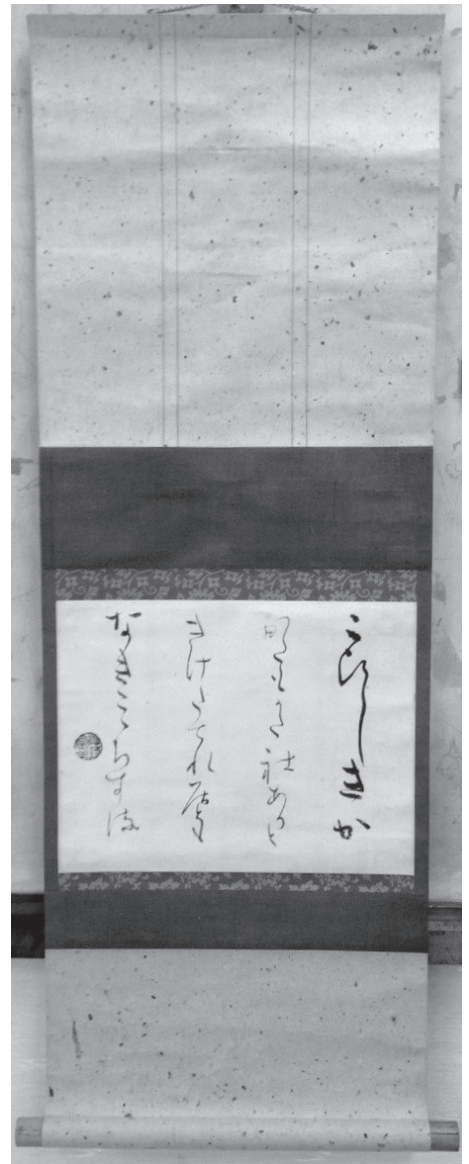
かた（多）もか（可）た（多）社ありと

きけた（多）てれ居とも

なきこゝちする（流）

落款印は縦2.6cm×横2.6cm「池萍堂印（朱文）」が押捺されている。

〈豊〉





日書57 おおくまことみち うたまき 大隈言道 歌卷

クE126

卷子

①日書 56 参照。

本軸の筆者は大隈言道<sup>①</sup>である。縦 29cm×横 348cm（紙本部分は縦 29cm×横 318cm）で、引首印は、縦 1.5cm×横 1cm「小竹居（白文）」、落款印は、縦 2.4cm×横 1.7cm「松竹（朱文）」が押捺されおり、題箋には「直卷書」と書かれている。釈文は以下の通り。

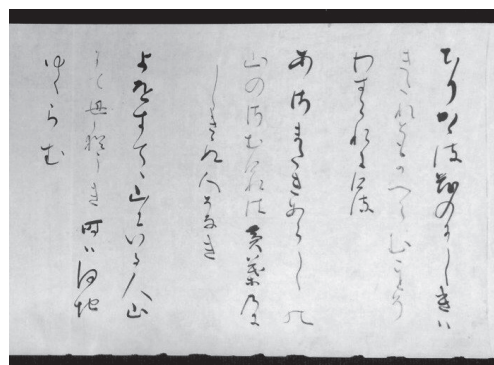
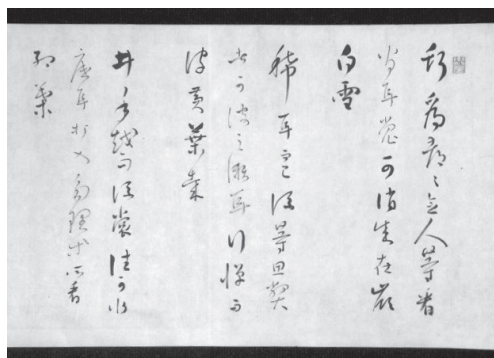
斯為都々念人等看 守耳嵬可消成在嶺 白雪  
稀耳而已保等思弊 者可波之瀬耳行憚而 波黄葉哉  
井手越而流裳佳可水 底耳於入多理等所看 紅葉  
乎差無氣尔婦有 矩必之数為也数乍 耶山乎出来之  
耶糜松之樹高那樂波 成二手嵬開登扁九 所觀布自波  
月觀乍直世流吾乎 寢農子弟末寐耶樂 人之間来  
我中而過尔之後嵬道 遷尔猶鳴不絶有矩 必数之声

ちりかゝる(流) 花のに(尔)しきは(八)  
きた(多)れとも か(可)へらむことそ(曾)  
わすられに(尔)け(介)る(流)  
あさ(佐)また(多)き あらしの  
山のさ(佐)むけ(介)れは 黄葉の(乃)に(尔)  
しきゝぬ人そ(曾)な(奈)き  
よをすてゝ 山に(尔)いる人山  
に(尔)ても(母) 猶うき時は(八)何地  
ゆくらむ  
なに(尔)は(者)な(那)る(留) なに(か)らの(者)  
し

もつくるなり いま(万)は(者)わか(可)み  
を な(奈)に(尔)ゝたとへむ  
さ(佐)くらちる 花のところは (八)  
は(者)るな(奈)か(可)ら(羅) ゆきそ(曾)降つゝ  
きえか(可)てに(尔)する  
ちりぬれ(連)は こふれとし  
るし な(奈)きものを け(介)ふこそ(所)  
さ(佐)くら を(乎)らは(八)折て(天)め(米)  
みよしの(乃)ゝよしの(能)ゝ山の(乃)さ(佐)  
くらは(者)な(那) 人つてに(尔)の(乃)み(三)きゝゝ  
わた(多)るか(可)な(奈)  
あらさ(佐)らむ 此よの外の(乃)  
おも(无)ひてに 今一た(多)ひの  
あふこともか(可)な(那)

立波之下尔成耶東 看二手二求合在磯 之群千鳥哉  
寂閑而川田之卒保 都老耳来都化流 節耳頼齡成  
怜日指入留要戸従 無拆出申不計不 理可難  
黄葉者何所佳良々□ □尔古処積而在等 言方毛無九  
華陰以可傳立満之入 相之鐘聞而來之人 嵬古廻安麗  
其方尔波出而有米 騰三日月之雲耳 立有夕晩之空  
朝々積在雪乎湯耳 焚而谷之清水嵬不 汲比可南

言道并書



〈豊〉

# 日書58 おおくまことみち たいせい の うた 大隈言道 退棲之歌

クE142

軸装

①かねこけんたろう  
(1853~1942)  
福岡藩士勘定所附・金子清蔵直道の長男。幼名は徳太郎。明治時代の官僚・政治家であり、司法大臣、農商務大臣、枢密院顧問官を歴任した。

本作品の筆者である大隈言道は、江戸時代後期の歌人である。略歴については、日書56を参照していただきたい。

言道は、和歌に専念するため天保七年(1836)39歳のときに弟である言則に家督を譲り、今泉に移り住んだ。「池萍堂」または「ささのや」と呼ばれたその住まいは、現在の今泉公園の東隣にあたる。

本軸は、彼が「池萍堂」に移住した際に詠まれた和歌であると考えられる。

作品全体の大きさは縦125cm×横68.5cm(紙面部分は縦30cm×横60cm)で、軸箱には「大隈言道先生退棲之歌 一軸」と書かれている。釈文は以下の通り。

いへを弟に(弟)ゆつ(徒)りて(天)

今泉といふとことに(耳)

すみ(三)けるをしらせ(勢)ま(満)

ゐらすとて(天)よめる(流)

言道

世の(能)中をお(於)も(母)ひもか(可)

けすの(乃)か(可)れきて(天)け(介)ふ

すみ(三)そ(所)むる今泉の(能)

さと

きの(能)ふまで(天)世をあ(安)き

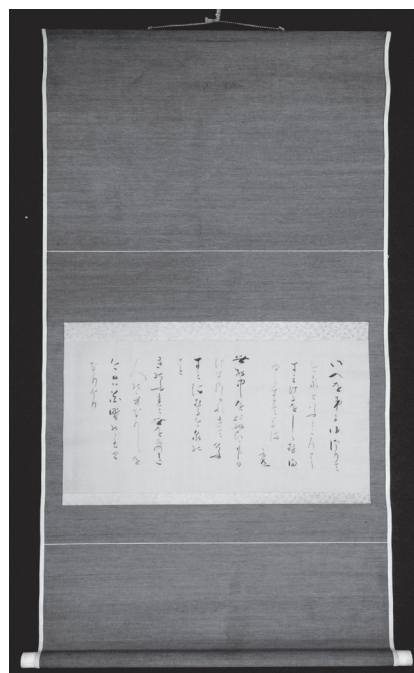
人の(能)身なりしを

今日は(八)花野の(能)こもり(里)

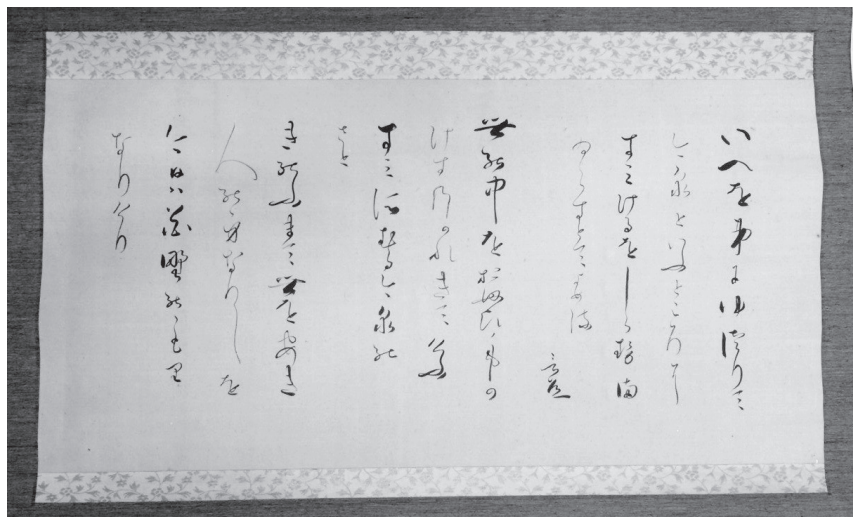
なりけ(介)り

池萍堂に隠棲した二年後の天保九年(1838)、百三十八首を収録した『新泉日記』を作成する。池萍堂へ移り住み一新の気持ちを込めて名付けられたのではなかろうか。

〈豊〉



今泉公園内石碑  
金子堅太郎書「大隈言道翁舊蹟」





日書59 おおくまことみち ぎょうそうしよじく 大隈言道 行草書軸

クE139

軸装

①ささきのぶつ  
な

(1181~1242)

平安時代末期から鎌倉時代前期の武将。鎌倉幕府の御家人。

本作品の筆者、大隈言道（寛政十年：1798～慶応四年：1868）は、江戸時代後期の歌人である。略歴については、日書56を参照していただきたい。

言道は、福岡を代表する文化人のひとりである。寛政十年、筑前福岡薬院（現在の今泉）の商家の長男に生まれ、幕末を生きた天才歌人として知られている。当時としては画期的な歌風で、庶民の暮らしや桜などの身近な自然を詠ったが、認められず、没後、佐々木信綱<sup>①</sup>により見いだされ、言道の歌は一躍脚光を浴びた。

その後、言道の歌は英訳され、海外でも高い評価を受けている。

慶応四年、71歳でこの世を去った言道は、香正寺に眠っている。墓石の「萍堂言道居士」と言う文字は言道の絶筆が彫られている。

作品全体の大きさは、縦175cm×横37cm（紙面部分は縦110cm×横25.5cm）で、釈文は以下の通りである。

散以理之石石間間能華副裳流不残春雨能空

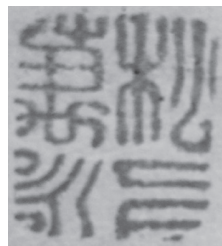
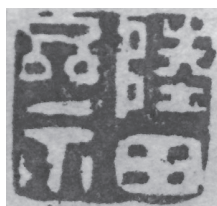
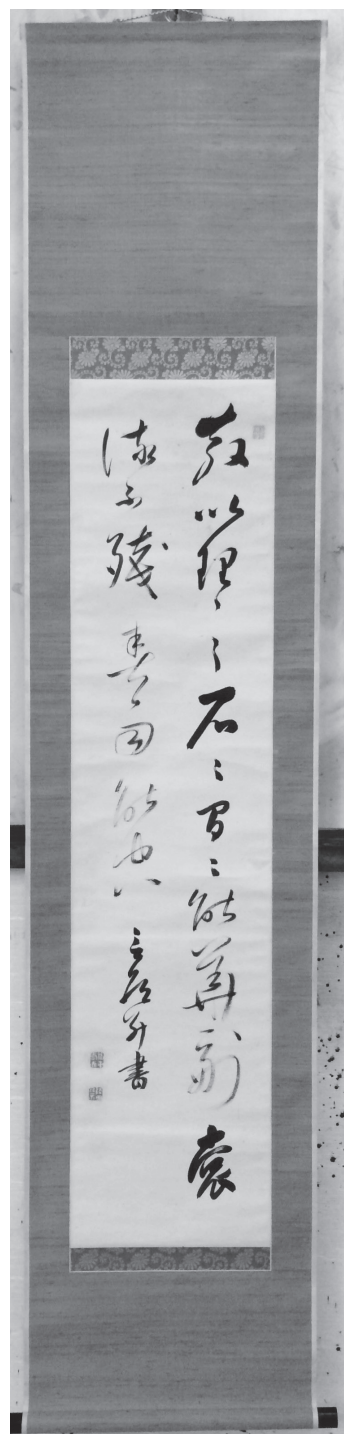
言道并書

引首印は縦1.7cm×横1.5cmで「松下萬咏（詠）（朱文）」、落款印は縦2cm×横1.5cm「牆東老夫（白文）」、縦1.5cm×横1.5cm、「陸田斎（白文）」である。

〈王〉



大隈言道墓（福岡市香正寺）



## 日書60

おおくまことみち か こ かん  
大隈言道 華乎観

クE114  
S43 年度  
軸装

①日書 54 参照。

大隈言道については、日書 56 を参照していただきたい。ここでは言道と詩について述べたい。

1839 年（天保十年）42 歳の時、日田へ遊学する。広瀬淡窓<sup>①</sup>の作詞から学んで、自身の歌想にさらに磨きをかけるためである。淡窓の詩の持論は、古人の模倣を排撃し、個性の発露を尊重することであった。言道も同様に、自己の個性を表現したいと考えていたため、思索の正しさを確かめたこととなった。言道は古語をほとんど使用せず、時に方言も交えた。歌題を時事に求めると、詩囊はさらに膨らんだであろうが、それをする事はなかった。

本軸の积文は以下の通りである。

華乎観弟我身能寶等乎<sup>不</sup>忘者如何而可経両何寸面尔  
乎理所者可多従数<sup>所</sup>尔打垂而玉可等所見藤鹿之華

何時老右可春乎得不知庭桜一枝二<sup>□</sup>之程平英国尋不得  
而帰吾身乎山桜以可尔観之耶等人

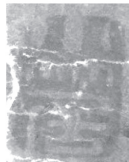
之間哉已可子茂宋数当々自乎啼雲雀雲上従呼可澤二子  
弟果無拳雲雀之聲為也<sup>以</sup>小<sup>耶</sup>子者

聞怒良務酔覚而今朝之母観波<sup>□</sup>遷二何時手折来華一枝  
春来八独楽之矩見我乎華耶

波之麗嚴之良自東所念 春<sup>□</sup>咏 言道

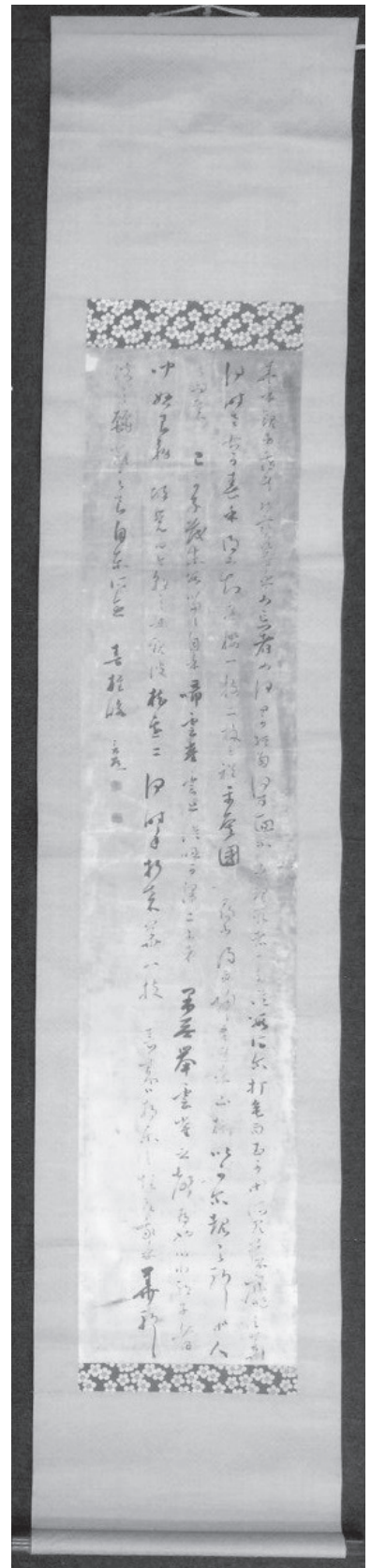
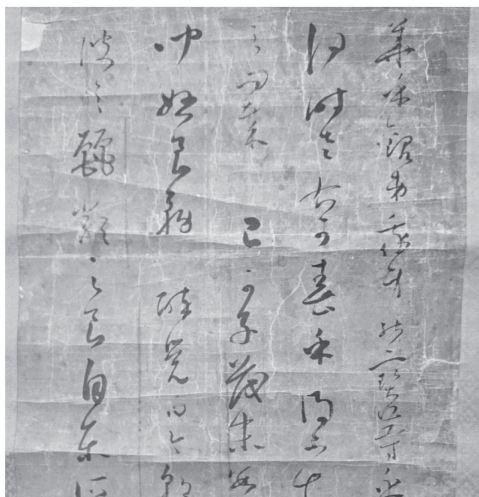
本軸の大きさは、縦 193cm×横 38.5cm で、紙本部分  
は、縦 128.5cm×横 27cm。引首印は「小竹居（白文）」  
（1.5cm×1cm）、落款印は「友雁亭主人（白文）」（1cm  
×1cm）、「言道（白文）」（1cm×1cm）である。なお、  
「言道」印は左に回転させた状態で押捺されている。

言道は立派な歌人であるためには、「運筆の優美」さも  
大切だと門人達にいましめていた。小ぶりながらも、  
潤渾の変化が伺え、軽妙で流れを感じ、「運筆の優美」  
さを表現しようとする気概が窺える。温和で質朴さを感じ  
る作品である。 〈江頭〉



（印面上部）

（印面下部）





## 日書61

## 大隈言道 書軸

クE125  
S43 年度  
軸装

大隈言道の筆である本軸は、縦 122cm×横 68cm（紙本部分は縦 31.5cm×横 66cm）で、落款印は縦 2.4cm×横 2.4cm「言道（朱文）」が押捺されている。

釈文は以下の通りである。

ゆきまより もゆるわか(可)な(奈)をめつ(川)らしみ(三)あとつ(川)  
けそ(所)むる み(三)やこひとか(可)な(奈)  
いつ(川)またか(可) きえのこるらしのへの(乃)ゆき わか(可)な(奈)  
つ(川)むへく なりに(尔)しものを  
わか(可)な(奈)つ(川)む 人のこゝろは(八)は(者)るめけと きふ  
もけ(介)ふも あらとふ(布)りつ(徒)ゝ  
うくひす(須)の こゑのた(多)えせぬ をやまた(多)は(八) わか(可)な(奈)  
つ(川)むへき ところな(奈)りけ(介)り  
わか(可)な(奈)つ(川)む 人のこゑこそ(曾) きこゆれは 流  
ともみ(見)らす ゆきは(者)ふ(布)れゝと  
け(介)ふもま(満)た(多) わか(可)な(奈)つ(川)みにや いてな(奈)まし  
わか(可)を問くる 人しな(奈)け(介)れは(八)  
もえいつ(川)る わか(可)な(奈)をみ(見)ても(母) か(可)な(奈)しきは  
ふ(布)りまさ(佐)りぬる わか(可)み(三)な(奈)りけ(介)り  
け(介)ふひとひ の(乃)とけくもか(可)な(奈) わか(可)せこか(可) わか(可)な(奈)  
つ(川)ましと いてに(尔)しものを  
いさ(佐)やこら わか(可)な(奈)つまゝし はるのゝに(尔)  
つ(川)もり(里)しゆきも むらきえに(尔)け(介)り  
うくひすの こゑするかた(多)に(尔) いてゝこそ(曾)  
の(能)へのわか(可)な(奈)も つ(川)むへか(可)りけ(介)れ  
こそ(曾)の(乃)まゝ ゆきふりしきて は(者)る(流)の(乃)ゝゝ  
もゆるわか(可)な(奈)も みえわか(可)ぬかな(奈)  
うめは(八)また(多) さ(佐)きぬるえたも なか(可)りけ(介)りと  
ほき山へに(尔) こしかひもなく  
は(者)るのゝそ(曾) いとな(奈)つ(川)か(可)しく なりに(尔)け(介)る わかな  
つ(川)み(三)に(尔)し ゆめをみ(見)つ(川)れ(連)は(八)  
はるの(乃)ひの もの(能)さ(佐)ひしきに(尔) たゝひとり  
わか(可)な(奈)生いつ(川)る の(乃)へに(尔)きに(尔)け(介)り  
お(於)しな(奈)へて つ(川)もりしゆきの ひとつとに(尔)  
きえのこれりと みゆるうめか(可)も

常貞

同

もとこ

貞則

もとこ

貞則

もとこ

常貞

則久

さゝこ

お(於)なしく

貞則

同

同

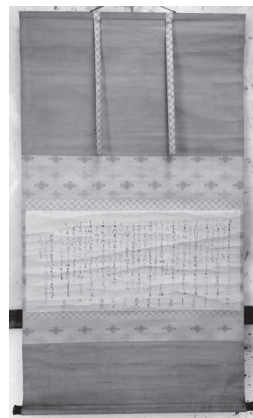
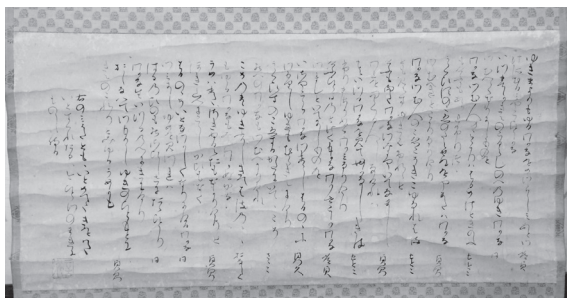
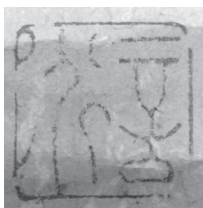
貞則

右のみ(三)うた(多)ともゝいとめてた(多)きを□□

いとすぐれたるは今ひとつ(川)のまきに(尔)

ものし侍る

〈豊〉



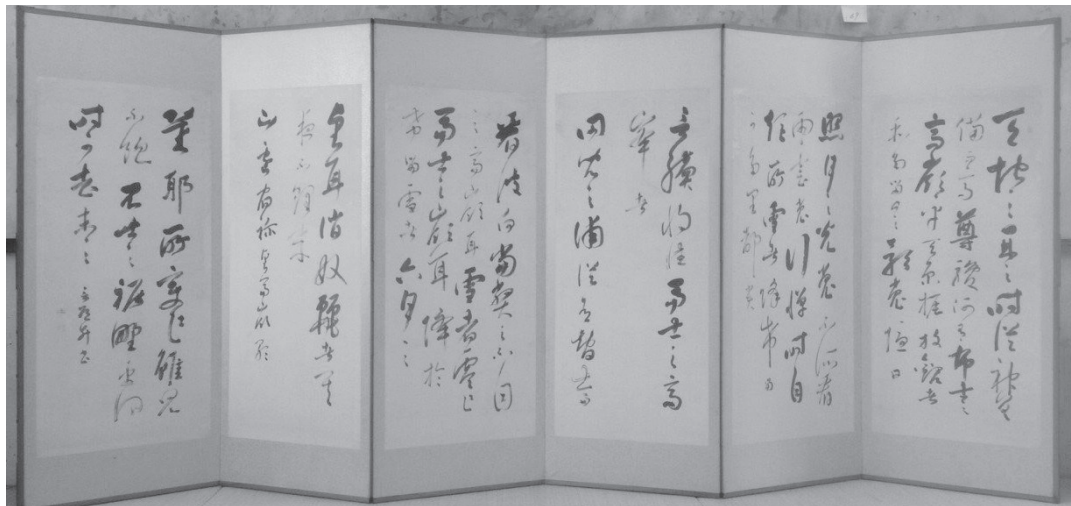
## 日書62

おおくまことみち ろつきよくびょうぶ  
大隈言道 六曲屏風

クE209

屏風

大隈言道については、日書 56 を参照していただきたい。

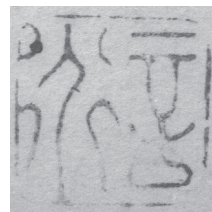
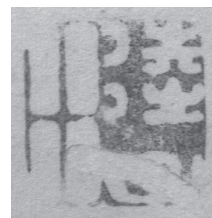
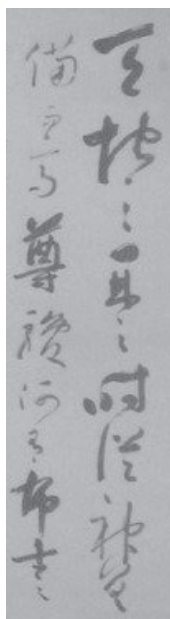
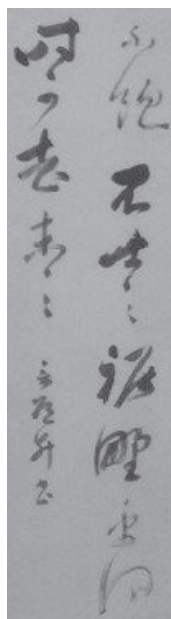


本作品の大きさは、縦 172cm×横 68cm の六曲屏風である。紙本部分の一枚の大きさは縦 131cm×横 59cm であり、引首印は「松竹（朱文）」（縦 2.4cm×横 1.7cm）、落款印は「陸子田（朱白相間印）」（縦 2.4cm×横 2.4cm）、「言道（朱文）」（縦 2.4cm×横 2.4cm）である。

釈文に関しては以下の通りである。

天地之開之時從神差 / 備而高尊駿河有布士之 / 高嶺乎天原振放觀者 / 和多留具械體鬼恒日照月之光鬼不所看 / 雨雲鬼行憚時自 / 矩所雪者降希留 / 可多里都貴  
言□將性富士之高 / 峰者 / 田兒之浦從有暫智士而  
看波白当弊之不目 / 之高嶺耳雪者零乍（作） / 富士之嶺耳降於 / 希留雪者六月之  
望耳消奴麗者其 / 夜不理来 / 山還宿祢望富嶺歌  
幾耶所變作雖見 / 不飽不土之裾野更同 / 時可去未之 言道并書

〈王〉





日書63 おおくまことみち の むらぼうとう に きよくびょう ぶ  
大隈言道・野村望東 二曲 屏風

クE111

二曲屏風

①ひらおさんそ  
う

望東が隠棲して  
いた山荘。現在、  
福岡市中央区平  
尾五丁目にある。  
市指定の文化財。

②きんのうは  
幕府を倒して天  
皇中心の新しい  
国家を作ったほ  
うがよいとする  
派閥。

③くわやまきよ  
うどうぼち  
山口県防府市桑  
山一丁目の大楽  
寺にある墓地。

④みようこうじ  
福岡市博多区吉  
塚三丁目にある  
曹洞宗の寺。

本所蔵品の筆者は二人おり、大隈言道についての詳細は、「日書56」から「日書62」を参照して頂きたい。野村望東（1806～67）は、江戸時代後期の歌人、幕末志士の庇護者。名はもと。文化三年（1806）九月六日、父黒田（福岡）藩士浦野重右衛門勝幸、母みちの三女として生まれる。読書を好み、書を能くし、技芸に通じた。文政十二年（1829）、24歳で同藩士野村新三郎貞貫と再婚して継子を育てる。夫とともに歌人大隈言道に入門、夫の隠退により平尾山荘①に移る。安政六年（1859）、54歳で夫に死別、剃髪して向陵院招月望東尼と称する。文久元年（1861）十一月上京の途につき、師大隈言道と再会、同時に京都周辺の時勢の変化に触発される。帰国後、山荘は平野國臣・月形洗蔵ら同藩士はもとより勤王志士交流の場となる。長州の高杉晋作、対馬の平田大江などをかくまう。藩論の一変により勤王派②は弾圧され、望東尼も捕えられ、慶応元年（1865）十月姫島に流刑、翌年九月、高杉晋作の指示により下関の白石正一郎方へ救出された。同三年十一月六日、三田尻で病没。年62。墓は桑山共同墓地③と明光寺④にある。歌集や著作があり、『野村望東尼全集』に収められている。

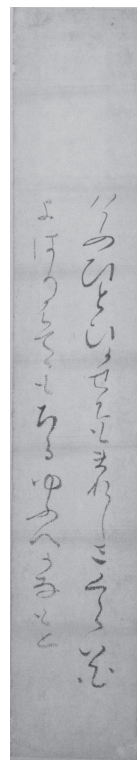
本屏風は、縦155cm×横132cmで二曲屏風である。短冊が六葉ほぼ均等に配置されている。一葉一葉幅が違っており、おおよそ縦が34.5cm～36.5cm、横が5.6cm～6.3cmである。右側三葉が大隈言道、左側三葉が野村望東によるものである。

釈文に関しては以下の通りである。

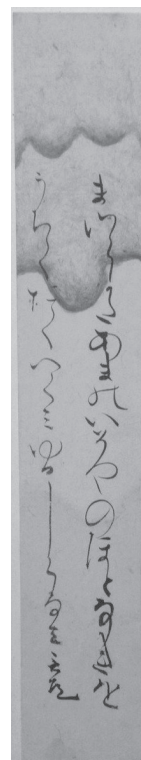
- ①「芭蕉 たわひつ(徒)ゝ / たゞかた(多)しとや / まきいでて / の(乃)ぎの山まに(尔)も / お(於)け(介)か(可)は(者)せをば(ハ) 言道」
- ②「あれは(者)てて / さ(佐)すともな(那)しと / 思ふらむ / しきみ(三)け(介)に(二)ゆる(流) / くすのまかつら 言道」
- ③「まつ[く]がた(多) / あまのいそやの / ほどな(那)きを / うちくたくべく / み(三)ゆるしらな(奈)み(三) 言道」
- ④「かすならぬ / 此身は(ハ)こけにうもれても / やまごころの(能) / たねは(ハ)とらせず(寸) 望東」
- ⑤「あさな(奈)(あさな[繰り返し符号]) / お(於)どろくば(者)か(可)り / つゆくもに / お(於)きやつれゆく / もも草のは(者)な(那) 望東」
- ⑥「け(介)ふひとひ / かぜは(盤)もまれじ / さくら花 / よはりはてても / ちるゆふべか(可)な(奈)もと」

野村望東は、大隈言道を師と仰ぎ、剃髪した後も上京し師弟関係を保っていた。二人の作品を見比べていると、共に回転運動が巧みに用いられ、やわらかさのある筆遣いで書かれており、近似した使用字母・文字造形のものも窺える。このことから二人の師弟関係をみていく上でとても貴重な資料となりうると言えよう。

〈福嶋〉



6 野村望東



3 大隈言道

日書64 ふたがわすけちか よんぎょうしよじく 二川相近 四行書軸

クE247

軸装

①日書 39 から  
42 参照。

②日書 39 参照。

③ここまでは、  
「墨 第 91 号」  
中に掲載されて  
ある古川善久氏  
の「郷土の書人  
[37]」を要約した。

④杜甫「返照」  
楚王宮北正黄昏  
白帝城西過雨痕  
返照入江翻石壁  
歸雲擁樹失山村  
衰年肺病唯高枕  
絕塞愁時早閉門  
不可久留豺虎亂  
南方實有未招魂  
〈書き下し文〉  
楚王宮北正に黄  
昏 白帝城西  
過雨の痕 返照  
は江に入って石  
壁に翻り 歸雲  
は樹を擁して山  
村を失う 衰年  
肺を病んで唯  
だ枕を高くし  
絶塞 時を愁え  
て早く門を閉ず  
久しく豺虎の亂  
に留まる可から  
ず 南方實に未  
だ招からざる魂  
あり

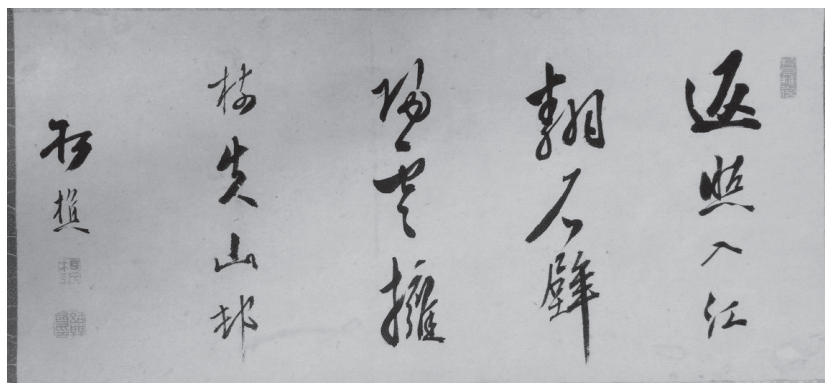
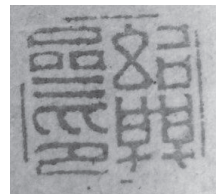
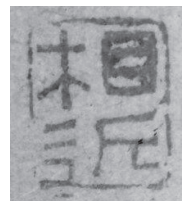
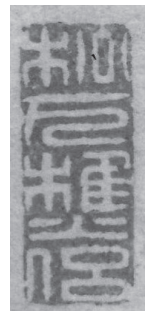
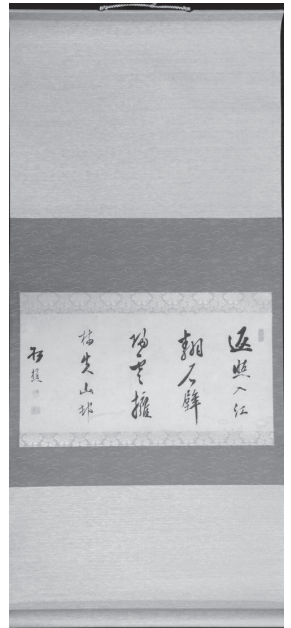
本所蔵品の筆者である二川相近は、明和四年（1766）十一月、黒田藩の御料理人頭格であった二川相直の子として博多の榊木屋町に生まれた。松蔭又は篁里と号し、通称幸之進と言った。幼くして亀井南冥<sup>①</sup>に師事して甘棠館<sup>②</sup>に学び、初めは政治経済の学に志したが、専心書道の研鑽に励む。大師流その他の書法を学び、二川様を創始し、執筆法を著した。国学を田尻梅翁に学び、『松蔭草廬録』、また、楽律にくわしく、『古学音符』を著し、今様に巧みで「鴨のはねがき」の遺稿がある。28歳の時、家職の料理人より書学士になったが、生来多病の身であり、中年の頃より門を閉じて外出せず、自適して天保七年（1836）九月二十七日70歳で没した。墓は、福岡市内大手町二丁目の圓應寺にある。

相近の書に対する嗜好は幼年時すでに頭角を現すが、その動機を与えたのは、父の相直の誘導による。16歳の頃に父は江戸在勤の藩邸から、拓本や『草訣辨疑』を送る。父の死後も遺訓を忘れず、母の家財を売り、書手本を購入し、道に精進する。その間、師にはつかなかったという。初めは石拓等を習い、暗中模索の時代もあったが、肉筆の拓本に魅力を感じ、博多の東長寺所蔵の弘法大師真筆を数年間臨摹した。その後、真の悟入を得、二川様の基礎を確立。何によらず自力啓発を主眼とした相近は、あらゆるものを歩猟し、学習究明に努めた。<sup>③</sup>

本軸は、縦118cm×横53cmである。紙本部分の大きさは、縦23cm×横49cmである。引首印は、白文で、縦2.5cm×横1cm。「松下樵侶」。落款印は共に朱文で、縦1.5cm×横1.2cmと縦1.5cm×横2cmである。1顆目が「相近」、2顆目が、「紹□斎印」。釈文は、「返照入江翻石壁 歸雲擁樹失山村 相樵」である。杜甫の「返照」<sup>④</sup>の詩に同じ部分がある。「入り日は川の面に射し込んで切り立つ巖に跳ね返り 溪雲は樹々の辺りに絡みつき山間の村も見えなくなった」という意味である。相近は病気をすることが多かったため、病にかかり世を愁えている心情がこめられているこの詩に特別な思いがあったのかもしれない。

この書は、字の大小、線の太細の変化が充実している。また、大師流の書きぶりも窺え、線の力強さも魅力である。

〈福嶋〉





日書65 ふたがわすけちか に ぎょうしよじく 二川相近 二行書軸

クE116

軸装

①ここまでは、「墨 第91号」中に掲載されてある古川善久氏の「郷土の書人 37」を要約した。

②「相近」二字を離して作られた下駄印とも考えられるが、ここでは、二字の間に、姓である二川の「二」をいれた「相二近」であると考察した。

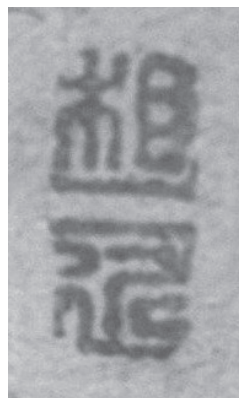
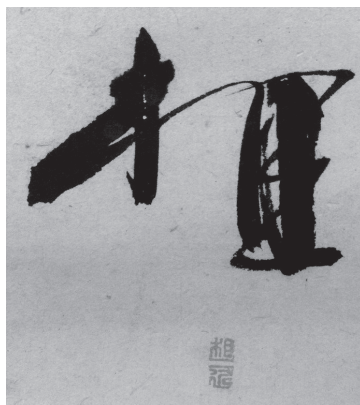
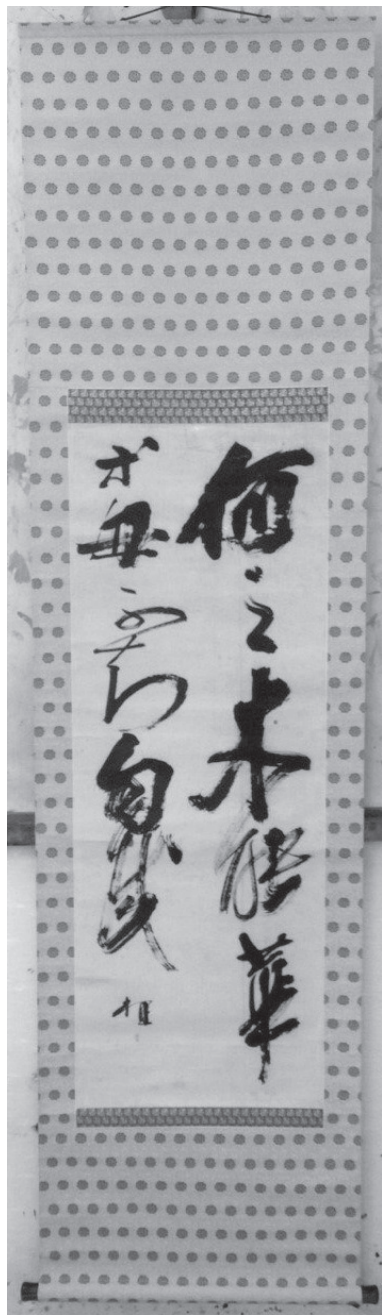
本所蔵品の筆者は、二川相近である。

相近の多能多芸はそれぞれ人並み以上に優れていたようである。書においても、楷・行・草はもちろん、篆隸・章草及び仮名に至るまで学ばないものはなかったという。それも、幟用の大字から細字にまで及ぶ。また、仮名は各種各様の書体に書き分け、大師流、孫過庭式など様々であった。稀に近衛様式の短冊等もあり、写本・書簡などは和様を用いていた。その和様の中にも鎌倉時代にのっとるものや、純然な御家流のものなどがある。また、書き物により、それぞれ調子をかえ、墓銘・木標なども適宜調和を研究した跡が看取される。このように、研鑽に励んだ相近は、退筆塚の銘に「退筆萬管、勞而無功。爰摹爰臨。六十之童」と嘆声をもらしている。①

本軸は、縦 209cm×横 55cm である。紙本部分の大きさは、縦 116cm×横 42.3cm であり、紙本全体にシミがある。落款印は、朱文で、縦 1.2cm×横 0.6cm。（「相二近」②） 釈文は、「何之木能華等母不知句哉相」である。松尾芭蕉 45 歳の作に「何の木の花とも知らず句ひ哉」という句がある。この句は、芭蕉が伊勢の外宮に参拝した際に詠んだもので、何という木の花の匂いかは分からないが、この神域には靈妙な花の香がただよって言うに言われぬ神秘の感があるという意味である。

この書の魅力は、力強い線質にある。墨を多く含んだ状態で「何之木」と入り、だんだんとかすれていくが、潤筆の部分も渴筆の部分も一様に筆が紙に食い込んでいくような線質で書かれている。また、潤渴の変化が大胆につけられ、作品全体に立体感があるのも魅力の一つである。日書 64 と比較したところ、線の強さは一貫しているが、字の大きさや連綿、渴筆の表現に違いがみられる。このような作品からも、相近の多種多様な書きぶりを窺うことができる。

〈福嶋〉



## 日書66

ふたがわすけちか じゅうぎょうしよじく  
二川相近 十行書軸

クE152

軸装



双川相近書

(上) 落款印  
「二川相近」  
(下) 箱書き  
「双川相近書」

本所蔵品の筆者は、二川相近である。

本軸は、縦 196cm×横 64.5cm である。紙本部分の大きさは、縦 120.5cm×横 49.5cm である。落款印は、白文で、1.3cm 角。

釈文は、

王子敬過戴安道草堂飲酣安道求子敬文子敬攘臂大言曰我詞翰不及古人與君一掃素壁今山陰草堂碑是也

春風吹船著浯溪扶藜上讀中興碑平生半世看墨本摩挲石刻鬢成絲明星不作包(苞)桑計顛倒四海由祿兒九廟不守乘輿西萬官犇竄烏擇栖南內清涼幾苟活高將軍去事尤危臣結春秋二三策(策)臣甫杜鵬再拜詩安知忠臣痛至骨世上但賞瓊琬詞同來野僧六七輩亦有文士書相追隨斷崖蒼蘚對立久凍雨為洗前朝悲

李白於便殿草詔時大寒筆凍帝令宮嬪十人各執牙筆呵之令白通取字

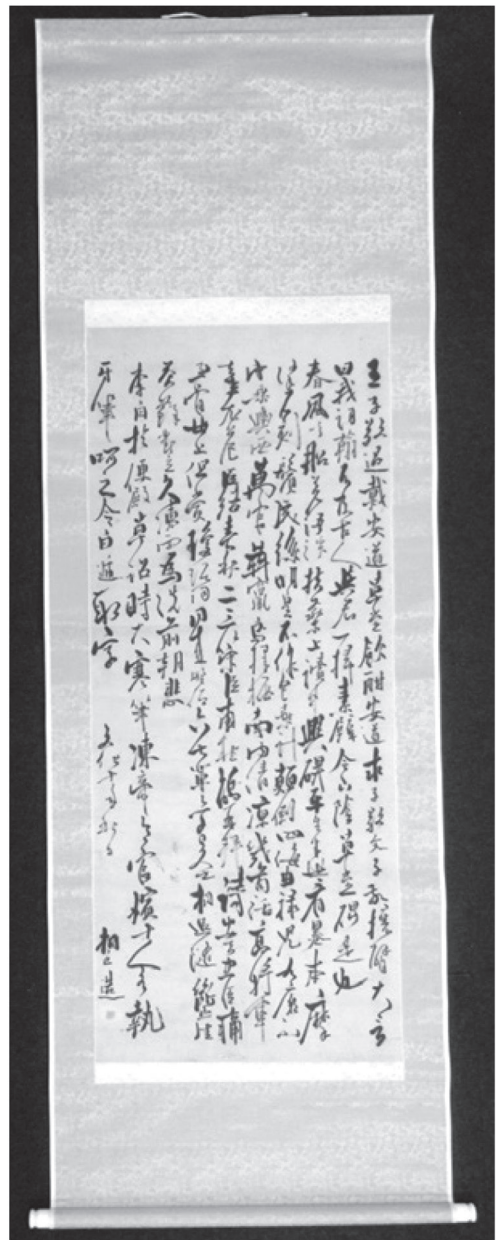
文化十年秋日 相近造

である。この幅には3つの話が書されており、王子敬(献之)と李白にはじまる文章は、宋の祝穆撰の『古今事文類聚』(古今の書から諸般の事項を抜粋分類した百科事典)の別巻に見られる。巻13 書法部の「草堂碑」と、巻14 文房四友部の「宮嬪呵筆」である。また、「春風」からはじまる中段の詩は、黄庭堅(山谷)が、浯溪にある願真卿の大唐中興頌を見た感動を、その隣に刻した摩崖文「書摩崖碑後」であり、これら三つの文章を一幅に書き留めたものである。また、文化十年とは、1813年のことであり、相近が47歳の時に揮毫した作品であることが分かる。

この書軸は、連綿を用いた行草書体で書かれている。相近の他の作品にも2・3字を連綿させて書くものが多く窺える。また、日書65にもこの書きぶりがみられるため、相近は、中国の明・清時代の書家の作品からも影響を受けていたのではないかと考えられる。

最後に、福岡の老舗文房四宝店である復古堂の河原田勇氏に提供頂いた二川相近の書(右下掲)を紹介する。この書は、天明年間(1781～1789)に9代藩主、黒田斉隆公(1777～1795)より、屋号として賜ったものである。紙本部分の大きさは、縦84cm×横32cmである。力強さや大胆さを感じさせる書きぶりであり、日書65の相近の書とも通ずる部分がある。また、「堂」の字などは、力強さの中にも伸びやかさや躍動感を感じさせる。儒学や歌など様々なことに通じていた相近は、書に対しても研鑽に励んでおり、その相近の人となりがこの三文字に現れているように感じられる。

〈福岡〉





# 日書67 <sup>しもえだとうそん</sup> 下枝董村 <sup>こうぎ</sup> 「好義」

クE227

軸装

①きくぐんおう  
ま現在の北九州市  
小倉南区合馬。②なかつぐん  
現在の京都郡。

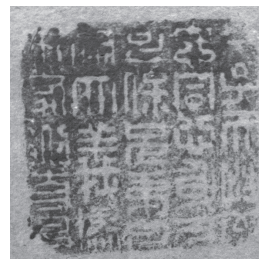
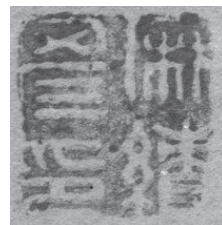
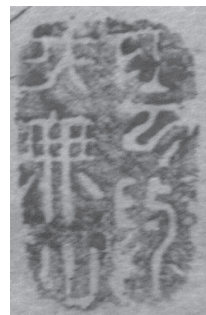
③ふでづか  
使い古した筆を  
集めて地に埋  
め、その供養を  
するために築い  
た「塚」のこと。  
日本では、江戸  
時代に寺子屋が  
できて以来、盛  
んに建てられた。



本所蔵品の筆者である下枝董村は、幕末から明治時代（1807～1885）にかけて活躍した書家である。別号は精研、字は道彦。文化四年（1807）、小倉城下に生まれ、7歳の頃から書を習い始めた。その上達ぶりはめざましく、非凡な才能を早くから発揮したという。中年、企救郡合馬村①に隠居してからは毎朝3000字書くことを日課としていた。幕末期には、長州藩との戦いに敗れた小笠原藩が現在のみやこ町に移ったことにともない、豊前国仲津郡②に居を構える。しかし、筆や墨の入手が困難であったため、藤蔓を叩いてほぐした「かずら筆」を使用した。また、その転居の最中であっても日課の千字文を学び、それを書き終えるまでは動かなかったという。董村研究家の棚田規生氏の祖母にあたるイシさんが董村の手習いの様子を見たことがあるという。当時董村の家があった木井馬場にある即伝寺という寺の縁板の上で手桶水にわらの束を浸して幟用の手習いをしていたということである。書に対してこれほどまでに熱心であった董村は、明治十八年（1885）79歳で亡くなるまで、多くの作品を生み出し、今でも現存するものが多い。八景山にある護国神社の鳥居をはじめ、木井神社や黒田神社などでも見ることができる。そして、みやこ町には董村神社があり、董村が自らの墓所とした岩がある。この岩には、董村が愛用していた鏡が埋め込まれており、「鏡岩」と呼ばれている。また、その下には、生前から自ら称していた「天雷彦命（あまのいかづちひこのみこと）」と刻まれた石碑がある。「余の死後もし干天あらば来りて祈れ。必ずや慈雨をもたらさん。」と言っていたという。さらに、小倉城に昭和四十年に建立された「筆塚」③の刻字は董村の筆跡から集字されたものとして有名である。

本軸は、縦176.5cm×横63.4cmである。紙本部分の大きさは、縦110.5cm×横50cmである。引首印は、白文で縦2.2cm×横1.5cm。落款印は共に白文で、縦1.8cm×横1.9cmと、縦2.8cm×横2.9cmである。

釈文は、「好義」であり、論語の第12の20にその語がある。「義」とは儒教の主要な思想であり、五常（仁・義・礼・智・信）のひとつであり、正しい行いを守ることであるとされた。そのため、常に正義を歩み、曲がったことをしないことを意味すると考えられる。引首印には、「雲與我無心」。落款印には、「麻績（オミ）彦印」「□子天性至<sup>因</sup>同心身名可保兄弟人倫大義協力家道德」とある。この書は、かずら筆を用いて書かれたものと思われるが、その線質からどっしりとした存在感が感じられる。また、墨量の多寡の変化もこの書の魅力といえよう。



〈福嶋〉

なかばやし ご ちく かん し かいしよじく  
 日書68 中林梧竹 漢詩楷書軸

ク715

軸装

①やまうちこう  
せつ

(1799~1860)

書画家、詩人。  
 会津出身。名は  
 晋、字は希逸、  
 別号は一枝堂。  
 亀田鵬斎らに学  
 び、市河米庵に  
 入門した。

②いちかわべい  
あん

(1779~1858)

書家、漢詩人。  
 名は三亥、字は  
 孔陽、別号に楽  
 斎・百筆斎など  
 がある。「幕末  
 の三筆」の一人。  
 著書に『墨場必  
 携』、『米庵墨談』  
 などがある。

③りこうしょう  
(1823~1901)

清国の政治家。  
 日清戦争の講和  
 条約である下関  
 条約で清側の調  
 印を行った。

④はんそん

(1818~1893)

清国の学者、書  
 家。金石学の大家。  
 門下には余  
 元眉のほか楊  
 守敬などいる。

⑤日書 69 参照。

中林梧竹（文政十年：1827～大正二年：1913）は、肥前国（佐賀県）小城出身の明治時代の書家である。父経緯、母能養の長男として生まれる。名は隆経、通称は彦四朗、勇馬。字は子達。梧竹のほかに個閑、忘言、鳳栖軒など多くの号がある。

天保十二年（1841）梧竹 15 歳の時、潘校興譲館に入学し、四年後、潘の留学生として江戸に上り、山内香雪<sup>①</sup>、市河米庵<sup>②</sup>の門に入って書を学ぶ。

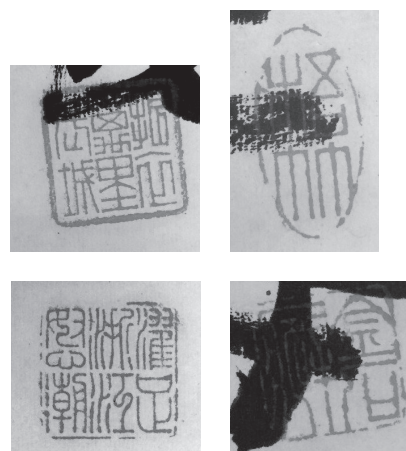
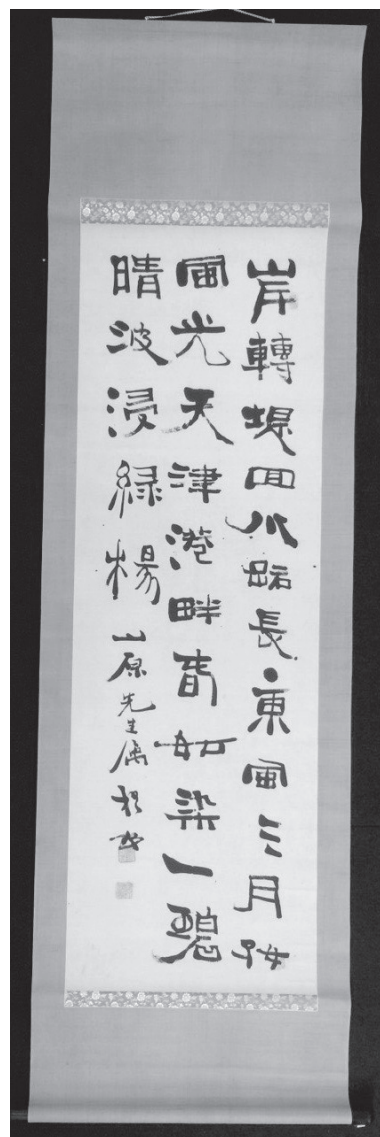
明治十年（1877）51 歳の時、長崎県庁に就職。翌年、長崎の清国理事府理事官であった余元眉から中国の碑版法帖の提供を受け、梧竹は日本ではじめて六朝書を学んだ。明治十五年（1882）には余元眉の帰国に伴って清国に渡り、李鴻章<sup>③</sup>に識られ、潘存<sup>④</sup>に就いて書法を学んだ。明治十七年、潘存より「日本の名士梧竹先生書法は古厚にして、篆勢、分韻、草情ことごとく具わる」の讃辞と多数の碑版法帖を携えて帰国。その後、副島種臣<sup>⑤</sup>の斡旋にて、東京銀座「伊勢幸」に居住し、以後三十年間、全国を漫遊しながら過ごし、「銀座の書聖」として親しまれた。明治二十四年（1891）65 歳の時、明治天皇に「十七帖臨書」を献上し、白羽二重の御衣を下賜される。八十代より、『梧竹堂書話』の執筆をはじめ出版を目指していたが刊行を待たずに逝去。その後原稿は行方不明となり、後に海老塚四朗兵衛（的伝）と梅園方竹によって、昭和六年（1931）に出版された。

また、『書聖中林梧竹』や『新編 梧竹堂書話』の著者で知られる梧竹研究家 日野俊顕氏（1929～2010）は佐賀新聞社の朝刊で「梧竹は篆隸楷行草の各体にわたり、芸術的な意識をもって理想的・浪漫的・象徴的なオリジナルの書風を創出した。」と語る。

釈文は「岸轉堤回水跼長東風三月好／風光天津港畔春如染一碧／晴波浸緑楊 山原先生属梧竹」とある。「山原先生」については不詳。篆意、隸意のある楷書での書きぶりとその落款から、梧竹五十代から六十代にかけてのものと推測される。

本作品の大きさは縦 210cm×横 60cm、紙本部分は縦 147cm×横 47cm である。軸装、紙面ともに状態は非常に良好である。引首印は「梧竹（朱文）」（縦 3.2cm×横 1.9cm）、押脚印には「金石癖（朱文）」（縦 2.1cm×横 2.1cm）、落款「梧竹」の下には「振衣萬里長城（朱文）」、「濯足浙江怒潮（朱文）」（ともに縦 3.0cm×横 3.0cm）の落款印が押されている。この四印は梧竹が特に気に入った作に押捺されたといわれる。文字の傾きや筆致の工夫における紙面配置の心地よさから、梧竹の造型的な芸術性を感じとることができる作品である。

〈曾我部〉





日書69 そえじまたねおみ ぎょうしよじく 副島種臣 行書軸

クE187  
S-49  
軸装

①こうどうかん  
1781年、佐賀藩第8代藩主であった鍋島治茂が古賀精里に命じて設立した藩校。  
②えだよしつね  
たね  
(1822~1862)  
江戸時代後期、幕末に活躍した佐賀藩の思想家、教育家、国学者。弘道館の教諭でもあった。  
③ぎさいどうめい  
い  
尊王思想を広げるための私塾として、枝吉経種により1850年に結成された。  
④おおくましげ  
のぶ  
(1838~1922)  
佐賀藩士、政治家。7歳で弘道館に入学。外務大臣、農商務大臣、内閣総理大臣、内務大臣、貴族院議員などを歴任。早稲田大学の創設者である。  
※  
⑤~⑦の注釈は、次頁（日書70）に記載。

副島種臣（文政十一年：1828～明治三十八年：1905）は、明治時代の官僚、政治家である。肥前国佐賀藩士で弘道館①の教授を勤める国学者であった父枝吉忠左衛門種彰（号 南濠）の次男として生まれる。幼名を次郎（二郎）、元服し竜種（りょうしゅ）、後に種臣、号を蒼海・一々学人と称した。

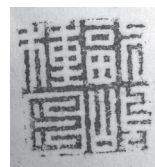
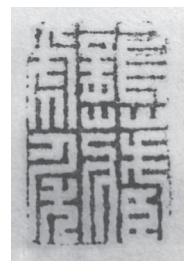
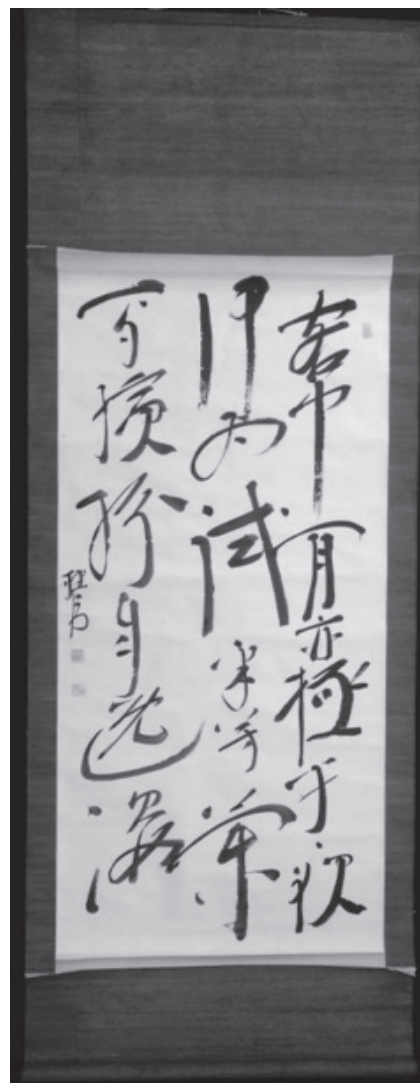
嘉永元年（1848）、21歳の時に弘道館の内生寮首班となり、24歳の時には兄 経種②（号 神陽）の首唱する「義祭同盟③」に大隈重信④・大木喬任⑤・江藤新平⑥らとともに参加。嘉永五年（1852）には、藩命により京都に留学し、矢野玄道ら尊攘派の志士たちと交友を持ち、兄の命で大原重徳に朝廷からの將軍宣下の廃止を説き、天皇政権による統一を進言する意見書を提出した。また青蓮院宮朝彦親王から佐賀藩兵百名の上京を促され帰藩したが、藩主鍋島直正に受け入れられず、藩校の国学教諭となった。父の死後、安政六年（1859）32歳の時、佐賀藩士である副島利忠の養子となり、副島姓を継ぐ。同年律子と結婚。翌々年35歳の時に兄経種が没した。元治元年（1864）から約二年間、致遠館⑦に遊学し、大隈らとともにフルベッキより英語、米国憲法などを学んだ。慶応三年（1867）には大隈重信と脱藩し、幕臣原市之進を介して大政奉還を唱えようとしたが、捕えられ藩命で謹慎を命じられる。

後に参議や外務卿などを歴任し、明治維新外交の立役者として活躍したが征韓論に破れ、明治六年（1873）に辞任した。その後、霞が関の自宅を手放して旅費をつくり、約三年間清国漫遊の旅にでる。帰国後は一等侍講・枢密院副議長等を努め、その活躍は元勳として名高いものである。また近代屈指の漢詩人・書人としてもその名は知られており、多くの書が残されている。

釈文は「客中間亦極乎欲／何為試采等蘭／写扮自逸姿 種臣」である。日書70にも同詩が書かれており、その下には蘭絵とみられる墨画が描かれている。

本作品の大きさは縦207.5cm×横77.3cm、紙本部分は縦134cm×横65cm。全体にはがれや折れ、紙面上部にしみがある。引首印は「龍藏虎居（白文）」（縦3.1cm×横2cm）、落款「種臣」の下には「副島種臣」（「副島種」：白文、「臣」：朱文）、「火國男子（朱文）」（二顆ともに縦2.1cm×横2.1cm）の落款印が押捺されている。「書名の変遷」（『没後百年記念 蒼海 副島種臣—全心の書—展 図録』）によると、明治九年（1876）、種臣49歳頃のものと推測される。

木簡のような軽快なりズムがあり、豪快闊達な書きぶりは、種臣の志士なる威勢を思わせる。



## 日書70

そえじまたねおみ らん え ぎょうしよじく  
副島種臣 蘭絵行書軸

クE186

軸装

※

日書 69 の注釈

⑤～⑦

⑤おおきたかとう

(1832～1899)

佐賀藩士。政治家。

⑥えとうしんぺい

(1834～1874)

佐賀藩士。政治家。維新十傑の一人。

⑦ちえんかん

佐賀藩が設立した藩校の一つ。1867年に鍋島直正が長崎に設けた洋学稽古所。

①ないとうこなん

(1866～1934)

東洋史学者。著書に『支那絵画史』、『日本文化史研究』など。

②たかむらこうたろう

(1883～1956)

詩人・彫刻家。詩集『道程』、『智恵子抄』など。

③かわひがしへきごとう

(1873～1937)

俳人。新傾向俳句を唱えた。著書『三千里』『碧梧桐句集』など。

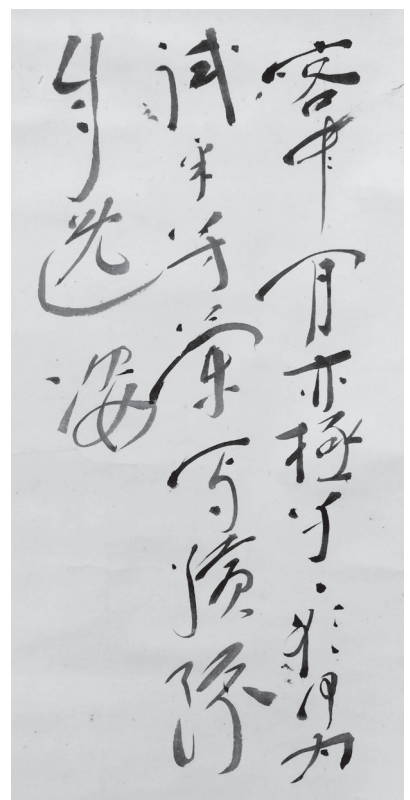
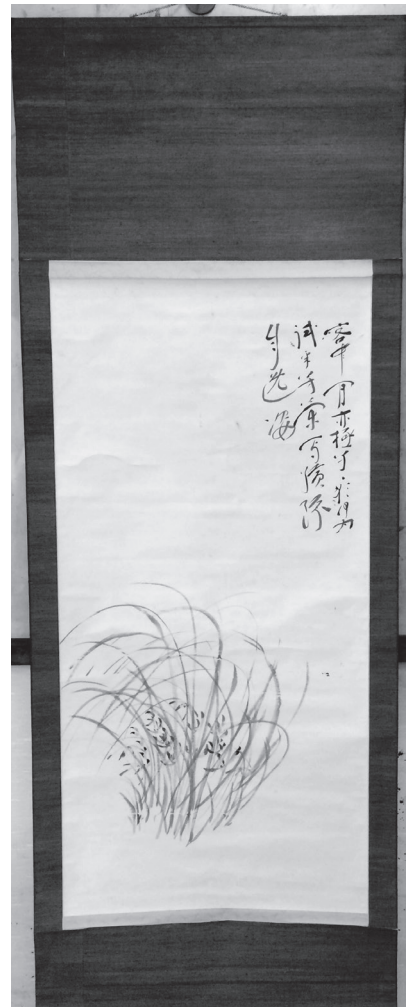
副島種臣の略歴については日書 69 を参照していた  
だき、ここでは種臣と書について述べたい。

種臣の書は、対象を深く溶かさんばかりの筆蝕と圧  
倒的な構成力、また自らの思想や政治行動と連動し  
て、その書は時代と自己の表現としてスケールが大き  
い。種臣の書の評価として、内藤湖南<sup>①</sup>は「高古勁秀、  
名状すべからず」、高村光太郎<sup>②</sup>は「拔群の書」、河東  
碧梧桐<sup>③</sup>は「近世では副島種臣が日本の書聖」と、讃  
辞が贈られる。また「その筆蝕には全身全霊が込めら  
れ、その学殖と巨大な構想力に裏付けられた書は東ア  
ジアの近代書史上、屹立している。」(『書家 101』参  
照)「書においては雄渾、奇逸、重厚、峻秀、清澄、  
その気迫の大きさ、書の変転自在な近世にその比を見  
ず、その高潔偉大な人格を思わせる」(『書道辞典 増  
補版』参照)等、高く評価される。

本作品は、副島種臣による書と蘭絵が描かれてい  
る。釈文は日書 69 と同文の「客中間亦極乎欲何為/  
試采等蘭写扮/自逸姿」であり、落款や押印はない。  
大きさは縦 209cm×横 77cm であり、紙本部分は縦  
134cm×横 65cm である。蘭絵は葉の部分で淡く、花  
の部分で濃く描かれ、非常に素朴な印象のある画であ  
る。書は控えめな配置になっているが、文字の動きに  
はリズムがあり、軽快な筆致である。

日書 69 にて前述した『没後百年記念 蒼海 副島種  
臣一全心の書一展 図録』の資料の中で、石川九楊氏  
がこの明治九～十年頃の書きぶりを「延引・遠心」と  
特徴づけている。起筆から引っ張るようにして長く直  
線的に書かれた横画にその特徴がみられる。

〈曾我部〉





主要参考文献一覧（＊本文中で記載した文献については、一部省略した。）

書名	編者又は著者名	出版社
『国史大辞典』	国史大辞典編集委員会	吉川弘文館
『日本歴史大辞典』	日本歴史大辞典編集委員会	河出書房新書
『角川大字源』	尾崎雄二郎，都留春雄，西岡弘， 山田勝美，山田俊雄	角川書店
『書道辞典 増補版』		二玄社編集部
『大漢和辞典 縮寫版 卷七』	諸橋轍次	大修館書店
『書家 101』	石川九楊 加藤堆繫	新書館
『儒俠亀井南冥』	高野江基太郎	共文社
『亀井南冥小伝』	河村敬一	花乱社
『儒学者 亀井南冥 ここが偉かった』	早船正夫	花乱社
『亀井南冥昭陽全集 第一巻』	同全集刊行会	葦書房
『亀井南冥昭陽全集 第八巻・上』	同全集刊行会	葦書房
『能古博物館だより 第 73 号』		公益財団法人亀陽文庫 能古博物館
『淡窓全集 上・中・下巻』	広瀬淡窓	日田郡教育會
『大隈言道とその歌』	佐佐木信綱，梅野満男	古今書院
『布留散東/はちすの露/草徑集/志濃夫廼舎歌集』	鈴木健一，近藤康子，久保田啓一	明治書院
『ささのやの園 言道歌碑の栞』		福岡市教育委員会
『大隈言道の桜』	桑原康康	海鳥社
『大隈言道と博多』	桑原康康	海鳥社
『大隈言道と私』	桑原康康	海鳥社
『西日本人物史（10）大隈言道』	桑原康康	西日本新聞社
『二川相近風韻』	二川瀧三郎	二川相近風韻會
『野村望東尼全集』	佐佐木信綱	野村望東尼全集刊行會
『没後一〇〇年記念 蒼海 副島種臣—全心の書—展図録』		佐賀新聞社
『書聖・中林梧竹不朽の書：没後百年記念特別展』	書聖・中林梧竹没後百年記念事業実行委員会	
『日本唯一閨秀詩人 原采蘋女史』	春山育次郎	原采蘋先生顕彰会編
『原古処，白圭，采蘋小傳及詩鈔』	山田新一郎編	秋月公民館
『日本女性人名辞典』	芳賀登 一番ヶ瀬康子 中寫邦 祖田浩一	日本図書センター
『日本人人名大辞典』	上田正昭 西澤潤一 平山郁夫 三浦朱門	講談社

